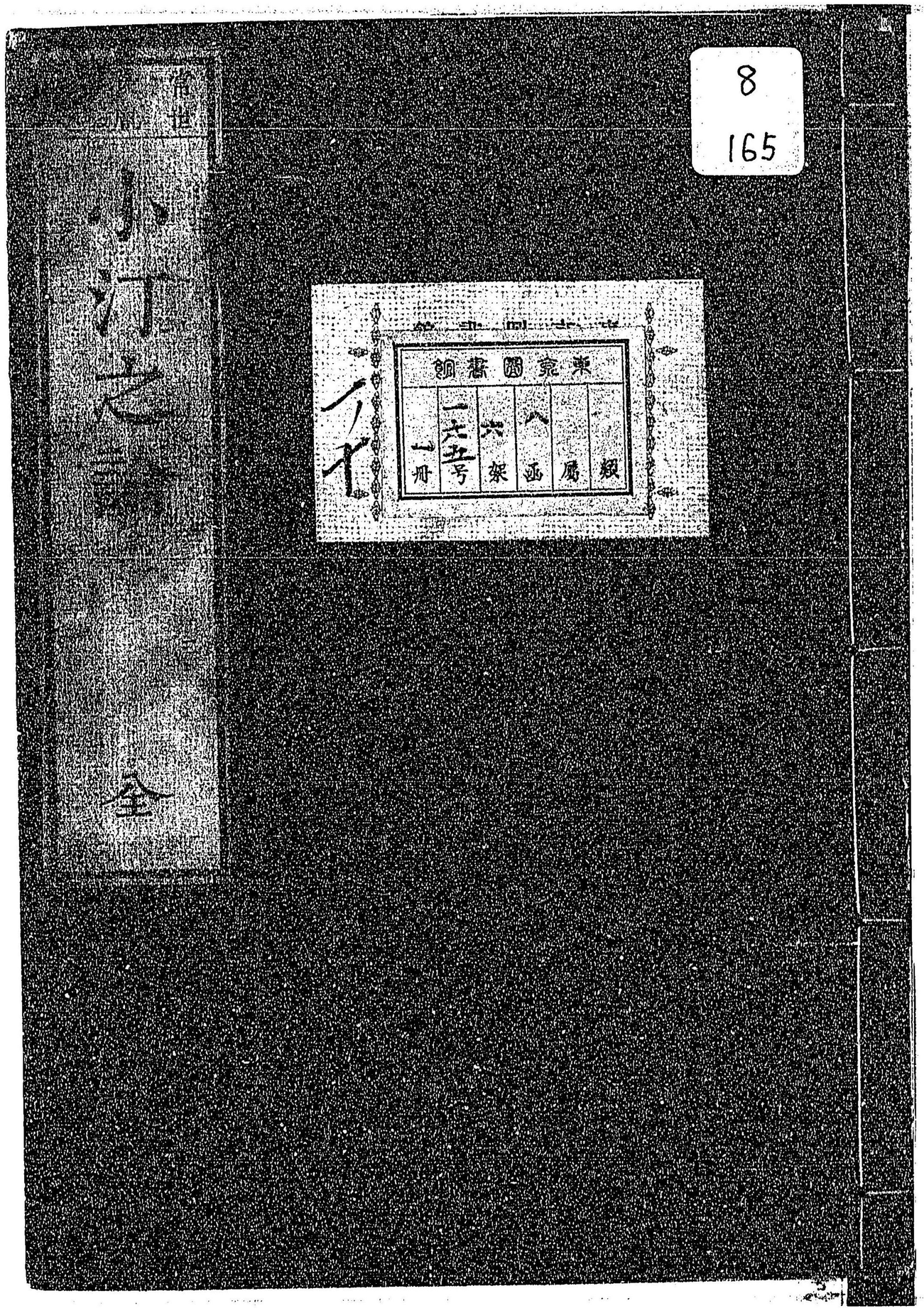

013893-000-3

8-165

小汀之論

常世　長胤（栄木　廼舎）／著

M14

ABB-0118

東京帝國圖書館藏

東京圖書館藏

小汀之論序

此一卷盤我學能兄邦業常世長儀賀
十擢劒呼拔持知大隆貳倒乐衛植底其
鋒論尔踞戾遲言問給飛帰大神能御
心手心登信臣世爾侵婿留事無久著波
新出太顔小汀之論登云不書身楚安邦留
典書国種ミ乃論能育留餓中斗毛西
神心手塩天日闇宮乃森隠遠甚
祥仁論比委君説聚物兄提世人能感
或知覧芝當尚大遠之續聚名金面神性

叢雄健流悠冬梨融九成詩潯稽雜度古甫
稱邊都便寡孔夫忘始一旦見多理所
贈播水須之頻傾因目邪汚穢鬼事怨
商兇朧沸露流聚樓鼠鳥見留心地乃
爲斯加薄兵磨摎樟舶而持衾白帆
打上弟風能隨大海原仁政棄武物山岸
敷蒲息濱亭壟記然磐鞅侯其志学
悠諦光哲義解說惋雛迷元書宗
惨糠梨閑其善是忘屈雜別
問丘舞圖敏心振越四帝徙乃十極創雄

三殿危打拚嵯跌嚴嚬嚬喫諜賀如空
朱斐嘗繊兎例藪中〻卑　朝霧の薫築
滿盡可知九夕悪逼侵忽龍母嘗麴餓
ゆ危案駱駝、勘君疑眺惑祢節所發
利氣漂其雜疑飛惑屆添心遠收氏天之眞
名井尒振濯季女河原仁母潔爲仕如久
平心迹互歸鄰醒見社姿瑞〻坂瓊
度薫寸美思不心棲迷出來扇希留掾返〻
見臣行雉伐神英野海原轄
脇進亨浮寐求紫寺乃如儷珥奇鬼能

奇毅知謀塢開拓奉　冠冕奉仕味浮興雄
然騰諸連篆手　事必波紀瞻帝　奴阿
波連此一巻漕論　斡敦窮今弗巳顕身
難載篆大虚　延雪霧越跋涉里高天
原　　今昇　隣諦拉芳太君
板方廣鳩停樂造理給邊霊月湯宮
居爾大国主神　の幽神之事仕奉
羅洲待行狀遠旨爾琴匂着茅　類心地序
為流れ此亦舷磻　櫂少教正内蔭右守
明治十三年平青農南歌半

小汀之論

權少教正常世長胤撰

言はくも畏き。大國主神。亦名、葦原醜男神。亦名、八千矛神。亦名、顯國玉神。亦名、大名持神。亦名、大己貴命。亦名、顯世を。遠き神代のむかし。天神の詔命以て。少彦名命と兄弟となりて。天下を造て堅め。後。顯露之事は。天神の詔命のはふまに。皇御孫命小捧げ奉て己命は潔く此顯世を避て給ひ。天上の日隅宮小到坐て。御親ら幽神之事を。知看し給ふとは。神代巻小見えたるが如し。然るを此頃教義を解く人大抵は右の幽神之事を以てあら

ぬくとふ云僻めて。大國主神ハ地球幽政の大主宰なる
バ。天下ふひのとある神等ハ更ふも云くべ。此顯國ふ祀
ひ奉る限ハ。天神とハへども悉く。此神の御治ふ從ひ給
てぬハなくとハひあるハ天下ふ生くく活る人々の。此
世を過て幽世ふ赴きたる時ふ其魂等の。善惡邪正をも
糺彈給ふ神なりとして。いよ其説を云ひ弘めお
つ。剩和魂大物主神。荒魂大國魂神の知者も。御職迄も奪
ふ媒となるのみならず。やがて此大神を以て佛氏の閻
魔王なりなど説なりて。大道を穢しもて行くくとの慨
くたばゆる儘ふ。其強言を少の矯直して。本緣を知らせ

ぞやと思ひ起ぬかくハふ長胤も始のなどハ其説ふ泥
て。既ふ上木きる大道本論を始め何ぐれのことふおけ
ても。右ふ云ふ大國主神を以て幽世の主宰なるをしに
論ひるきど。今其説の非言ふることを悟得たるからふ。
其誤をも補むと思ひての態ふて。見む人此心を得て
くこのし。

神代巻ふ。時高皇産靈尊乃還遣二神。勅大己貴神曰。今者聞
汝所言。深有其理。故更條々而勅之。夫汝所治顯露之事。宜是
吾孫治之。汝則可以治幽神之事。又汝應住天日隅宮者。今當
供造。卽以千尋栲縄結爲百八十紐。其造宮之制者。柱則高太

板則廣厚。又將田供佃。又爲汝往來遊海之具。高橋浮橋及天鳥船亦將供造。又於天安河亦造打橋。又供造百八十縫之白楯。又當主汝祭祀者天穗日命是也。於是大己貴神報曰。天神勅敎慇懃如此。敢不從命乎。吾所治顯露事者。皇孫當治。吾將退治幽神事。乃薦岐神於二神曰。是當代我而奉從也。吾將自此避去。卽躬披瑞之八坂瓊而長隱者矣。

○時高皇産靈尊乃還遣二神勅大己貴神曰。汝經津主神と武甕槌神を。再び葦原中國小天降して。大己貴神小勅命を宣らしめ給ふなり。○今者聞汝所言深有其理。故更條々而勅之とハ。此前文小。天神遣經津主神武甕槌神使平定葦原中國時二神曰。天有惡神名曰天津甕星亦名天香々背男請先誅此神然下撥葦原中國云々。既而二神降到出雲五十田狹之小汀而問大己貴神曰。汝將以此國奉天神耶以不。對曰。疑汝二神非是吾處來者。故不須許也。於是經津主神武甕槌神則還昇報告とある文を受たる文小。其ハ大己貴神の經津主神と武甕槌神の申せることを。深く疑ひ坐て吾が處小來たるかハあるまじと申て。諾ひ給ふ故小。二柱神ハ天上小參昇て天神の大前小其をしを具小奏し給へるなり。○夫汝所治顯露之事宜是吾孫治ハ。舊事本紀小。顯露之事とあるをなり。

纂疏ニ顯露之事者人道也とあて。口訣に汝所治顯露之事者造國治天下。以宜奉皇孫也とあて。ト部兼倶抄ニ。顯露之事王道ハあらそれて。天下を治るのらはかる事なで皇孫ニ附與し云々とあるゞ如し。其ハ此時迄大己貴神の知看し。國土及其御所爲をバ悉く捧げ奉らしめて。其を皇御孫命ニ事依し奉て。千代萬代ニ知看すべた御職制を。宣別給へる神勅なり。○汝則可以治幽神之事は。今の版本ニもゞ可以治神事とのみあるハ。幽と之字を脫をるかて舊事本紀ニ。汝則可以治幽神之事と有るを以て思ふニ。顯露之事ニ對て置し字かきバ。此處も

幽神之事と四字あてけむを後ニ寫し脫せるさと決けきバ。此を思い得て補へるなて。但し舊事本紀ハ誰も知たる偽書ニハあれど。既ニ序文の如く。厩戸皇子と馬子宿禰の物し給へる書かるべけきど。後ニ思ふ旨なる人の恣ニ補ひもし減しもたることと疑ひふし。然れども其中ニハ本書の存きるふしぶしもあてとれやもれバ。其條々ニ至てハ。古事記日本書紀ニ先だちふる古書にして。其原書とも云ふべき書ふるを思ふ思ふべし。若し此をみながら後の偽書かて ときバ。古事記日本書紀古語拾遺と事實を一ニして字遣も其儘ふる條々の所なるハ。專ら古事記日本書紀古語拾遺ふどを採て作れる書かること疑ひふけきバ。若し其原書の亂脫を糺さむとれる時ニ至てハ。則古事記日本書紀古語拾遺の異本とも云ふべき書ふるを思ふべ。口訣ニ。汝則可以治神事者仰德可奉祭祀也。とある是ふて。ト部兼倶抄ニ。汝ハ退きて治神事よとの神勅也。

とも見えたり。さて其幽神之事とハ次ニ云フ如く。大己貴命の天上の日隅宮に到リて坐して。幽世リ在リ給ふ。幽世比神等を齋き祀るべき御職制を宣別給へる神勅なり。但し高皇産靈神ハ。顯露之事も幽神之事をも。統知リ給ふ大神ふるゑ故ニ。かくハ宣別給ふるぞあり。

○又汝應住天日隅宮者今當供造。卽以千尋栲繩結爲百八十紐。其造宮之制者。柱則高太。板則廣厚。殊更リ天上ニ嚴めしく造リ備へ給ふ大宮を以ふふか。出雲風土記杵築大社の事を云へる處に。專ら此條と同ことのあるを。既ニ日本書紀を撰ばしめし後に。出來たる風土記ニ出ばバ。此處の文意を採ばるも知るべからぜ。左ハも右リも此と彼とハ。其所在別なり。思ひ惑ふ人となれ。纂疏に。或說天日隅宮卽在天上之宮也。神之所居曰宮といひて。此天日隅宮をば。古人も既く天上のことゝ見らきたるを思ふ。ぜ。偖此處ニ或說と云ふハ疑。ふく私記の說を採きるからむ。そは釋紀ニ引る私記の問ニ。此天日隅宮者。神代高皇産靈尊。在于天上。以武甕槌經津主二神勅大己貴神之詞也。於天上以出雲國定乾方之條。聊貽疑。殆如何とあるは諾。ふる問ふて。實ハ杵築大社を指て天日隅宮と宣へるふハ。ひらぜ。天上ニ嚴めしく造給へる宮なるを。其ハ左まき右ほれ。此或說ハ。纂疏を物せらきし時を。以前の說ふることハ云ふも要なり。卜部兼俱抄ニ。天日隅宮ハ。天神うら作此宮附大己貴神也。日隅ハ天

上ふてハ當戌亥之隅也。此國ふてハ出雲大社也とある
も云ひ狀ハ言痛け共ど。此段の天日隅宮なば。天上の事
やしろ杵築大社とな云い分たる答なて。其ハ古書中ふ
天ふ坐す神の大御口づから。此國土の物を指て。天日隅
宮。又天鳥船。天安河などの如く。天某と詔へる例ハあら
ばるなて。但し中臣壽詞ふ自其下天乃八井出牟とある
ハ。天神御親ら天上なる忍穗井の水を。此顯國
ふ廻らして出し給ふぞ故の詔ふ共ば。此國土の物を指
て。天某と宣へる例ふハからざるふり。れて天上なる忍
穗井戔此國ふ廻らして。出し給ふよしハ。大同本記なる
天村雲命の。水取の故事ふどなも。合せ見て知るべし。
此一事な以ても右の天日隅宮ハ。天上なるうとな辨ふ
べし。神祇令義解ふ。天神者出雲國造齋神等類是也とあ

○小汀之論

るも。大己貴命當初ハ國神ふはあ共ど。此詔命のあてし
ゝ以來。其現御身ハ天神とおて給ひて。常ふ天上の日
隅宮ふ鎮て坐せな以て。天神の部ふ收たるを思ふべし。
抑天神とハ常ふ天上な御在所とし給ふ神をゝひ。又國
神とハ常ふ國土を御在所とし給ふ神をゝふ稱ふて。續
紀の宣命ふどふ。天爾坐神國爾坐神どゝ云ふ共なて。然
れども時ふ臨て天神の國土ふ降給ひ。國神の天上ふ昇
給ひて。天地互に相通て往來し給ふうとのあるハ。今云
ふ限ふあらず。神名式ふ。出雲國出雲郡杵築大社名神大
とある社を。風土記ふどふ。天日栖宮とあ
るハ。天上の日隅宮の稱號を轉きるふて。是ハ末ふて彼
ハ本ふて。其例ハ常陸風土記香嶋郡の處ふ。自高天原降

來大神名稱香嶋天之大神。天則號曰香嶋之宮。地則名豐香嶋之宮と見えたる稱を。神名式ハ。常陸國鹿嶋郡鹿嶋神宮名神大月次新嘗とあて則天上の稱號を轉せるなる思ふべし。又神代卷ハ。伊弉諾尊功既至矣。德又大矣。於是登天報命仍留宅於日之少宮とある。日之少宮を。神名式ハ。近江國犬上郡多何神社二座とある社ハ轉ーて。此も後ハ日之少宮と云ひ。猶天香山ふどを始め。何ぐれと。天上の物の稱號の。此國土の物ハ轉ぜる事の多うるを思ひ合すべし。

然らバ杵築大社の始ハ何ふと〻ふハ。古事記大國主神の國避條ハ。此葦原中國者。隨命既獻也。唯僕住所者。如天神御子之天津日繼所知之登陀流天之御巢而。於底津石根宮柱布斗斯理。於高天原氷木多迦斯理而。治賜者。僕者。於百不足八十坰手隱而侍。と見えるぞ。己命の御魂を留め置給ふべき。今の杵築大社を乞給へる始なて。其ハ出雲風土記母理鄉の處ハ。所造天下大神。大己持命越八國平賜而。還坐時。來坐長江山而詔。我造坐而。命國者。皇御孫命平世所知依奉。但八雲立出雲國者。我靜坐國。青垣山廻賜而玉珍置賜而守詔。故云文理。とある。玉珍置賜而守ハ。御靈實を置て守給ふと〻ふ義ふく。故其八坂瓊ハ。則杵築大社の御靈實からむとたぐえるて。大倭神社註進狀ハ引る神代卷ハ。卽躬披瑞之八坂瓊而。長隱常世鄉者矣とある瑞之八坂瓊こゝをかて。又崇神天皇紀ハ。小兒の告ハ。玉菱鎭石出雲人祭眞種之甘美鏡。押羽振甘美御神底寶。御寶主。山河之水沫御魂靜挂甘美御神。底

寶。御寶主也なども有り。故是等を以て。杵築大社に坐ハ。大己貴命の現し御身にハあらずして。すべての御靈なることを知るべきなり。出雲風土記楯縫郡の處に。所以號楯縫者。神魂命詔。五十足天日栖宮之縱横御量。千尋栲繩持而。與百結々八十結々下而。此天御量持而。所造天下大神之宮造奉請而。御子天御鳥命楯部爲而。天降下給之爾時退下來坐而。神宮御裝束楯造始所是也。仍至今楯桙造奉於皇神等。故云楯部とあるハ。正しく杵築大社を造始め給へる時の傳にハあれど。彼と此とハ其所在別にして。天日栖宮の稱號と。其制作の狀に至てハ。全く天上

比日隅宮に。效へるものとおぼえるなり。祝詞式なる神賀詞に。乃大穴持命乃申給久。皇御孫命乃静坐牟大倭國申天。己命和魂乎八咫鏡爾取託天。倭大物主櫛𤭖玉命登名乎稱天。大御和乃神奈備爾坐。己命乃御子阿遅須伎高孫根乃命乃御魂乎葛木乃鴨能神奈備爾坐。事代主命能御魂乎宇奈提爾坐。賀夜奈流美命乃御魂乎飛鳥乃神奈備爾坐天。皇孫命能近守神登貢置天。八百丹杵築宮爾静坐支とあるハ。大己貴命の現し御身の鎭り坐る如く聞ゆるに似たれども。然にハ非ず。此も出雲國造が朝廷に參上て奏せる壽詞にして。所謂稱辭なるが故なり。思ひ惑ふこと勿れ。又古事記須世理毗賣命の御歌の終に。卽爲宇伎由比而。宇那賀氣理弖。至今鎭坐也とあるハ。男女互に頸に御手を打懸て。親く竝び居るゝしの言葉なるが。至今とある上ハ。神代の時を云にハあらずして。彼古事記を撰れし時を指て今と云へる。所謂本註なきバ。現し御身とすべての御魂との差別にハ拘らざるなり。神名式に出雲國出雲郡杵築大社名神大に坐て。同社坐大神大后神社とあるハ是なり。風土記に向社と見えて。此向ハ嫡妻の嫡の義なるべし。又神門郡に。同社坐和加須西利比賣神社と云

ふもあり。出雲風土記杵築郷の處ハ。八束水臣津野命之國引給之後。所造天下大神之宮。將奉而。諸皇神等參集宮處杵築。故云寸分とあるを。先指ハ大己貴命の國避の際ハ大己貴命の御祖と坐す。八束水臣津野命之國引給之小係て。種々の說ハあるとも足ぬ非言ふて其故後と云る。其國引の故事ハ。遙ハ以前のことに一て。此ハ追攜たる後を指たる文意あるが所謂大國主ハ。盛小天下を知省一給へ、る時の。大宮を杵築給ひ一傳ハて。國避の際ハ係たるハあらざるなて。其ハ古事記大國主神の根堅洲國ハ到て還て坐る時ハ。須佐之男命の詔小。爲大國主神亦爲宇都志國玉神而。其我之女須世理毗賣爲嫡妻而。宇迦能山能山本於底津石根。宮柱布刀斯理高天原氷椽多迦斯理而居是奴也。とあるを受けたる傳ハて。專ら此顯世ハ。ます一、時の。大宮造のことなるを思ひ合へし。

○又將田供佃ハ。天上ハある御田を。彼の天上の日隅宮ハ住給ハ。大己貴命ハ寄て。朝の御膳夕の御膳ハ聞食む。御稻を供佃一め給はむとなて。さて天上ハ水田のある証ハ。神代卷ハ。卽以其稻種始殖于天狹田及長田。其秋垂穎八握莫莫甚快也。とある是なて。又神等ハ御田を寄せ奉一例ハ。大神宮儀式帳などを始て多き中ハ。神功皇后紀ハ。爰定神田佃之時。引讎河水。欲潤神田。堀溝及于迹驚岡。大磐塞之不得穿溝。皇后召武內宿禰捧劍鏡令禱祈神祇。而求通溝。則當時。雷電霹靂。蹴裂其磐。令通水。故時人號其溝曰裂田溝。とあて。又顯宗天皇紀ハ。月神著人謂之曰。我祖高皇產靈有預鎔造天地之功。宜以民地奉我。月神。若依請獻我。當福慶。事代由是還京具奏。奉以歌荒樔田。壹岐縣主祖押見宿禰侍祠。と見え。又日神著人謂阿閑

臣事代曰。以磐余田獻我祖高皇産靈。事代便奏依神乞獻田十四町。對馬下縣直侍祠。ほど其他數ふる小邉あらず。

○又爲汝往來遊海之具。高橋浮橋及天鳥船亦將供造とある。此海ハ顯國小ある海ハあらず。決て天上小ある海を指て詔へるからむとおぼえたり。其ハ天上小海あるゝとハ未古典小見えぬとゝ。神代卷小。素盞嗚尊之田。亦有三處。號曰天樹田。天川依田。天口鋭田。此皆磽地。雨則流之。旱則焦之。とある天川依田ハ。常小天上の川小屬てある田小て。雨のふる時ハ則流るゝよりかゝるゝ。其川水の流を落る所ハ。卽て海かるゝと推て知るべし。又天上小香山。安河。狹田。長田。かど山も河も田も畠も見えるゝ。ハ海もかゝるとハ云ひがたし。高橋浮橋は。神代卷小伊弉諾尊伊弉冉尊。立於天浮橋之上。共計曰。とゝ。又古事記小。故二柱神立訓立云多々志天浮橋而。指下其沼矛。以畫者。また於是天忍穗耳命。於天浮橋多々志此三字以音而。とある浮橋と同じ橋小て。其ハ大虛空小浮雲の如く高くかゝりて浮上たる橋かる故小。高橋浮橋とハ宣ふるならむ。此ハ高橋と浮橋と二つある小ゝ非ず。共小一の橋かるを。たゞ高橋浮橋と語を對て詔へるのみ。其例ハ神功皇后紀小。以千繒高繒置琴頭尾とある。千繒ハ其數の多きを云ひ。高繒ハ其繒の高きを思ひ合べし。さて天鳥船の天も。天上の物を以て。

造給ふ故の稱ふること。上ふ云ふ天日隅宮の天と同ど義ふか。但〜此ゑ鳥船と宣へるハ鳥の翔る如く疾く走るよ〜の名と聞えたゑ○又於天安河亦造打橋ハ天上ふある安河ふ彼日隅宮よゑ。打掛る橋ゑ宣へるゑ。神代巻ふ。于時八十萬神會合於天安河邊。古事記ふ。故爾各中置天安河而。ま〜是以八百萬神於天安之河原。神集々而。又坐天安河。河上天石屋。名伊都之尾羽張神などにのる天安河られ。又打橋ハ。萬葉十ふ。機躍水持往而天河打橋度公之來爲とある如く。此打橋ハ常ふハ引抉〜置て。其時々ふ臨て打掛る橋なるゑとハ。既ふ先哲の云ゑ

ゑ。ふるが如〜。故此打橋も上ゑ〜ふ。天日隅宮よゑ。此處の天安河迄。打渡ゑ橋ふる事〜ふも要也。但〜右の天日隅宮亦天烏船。天安河の天ハ。みな高皇産靈神。天上ふ坐〜つゝ。直ふ天上の物ゑ指て詔へる部命ふゑバ。此國土の神人の顯國の物ゑ以て。天上の物ふ准へて天某と稱へたるとハ太く異ふゑ。思ひ惑ふ。ことなこの也。○又供造百八十縫之白楯ハ。神代巻ふ。彦狹知神爲作盾とあゑて。天上ゑて神等ゑ齋き祀る〜。楯ゑ供へ奉〜事此ゑ以て知られたゑ。纂疏ふ。白木色。大嘗祭時。宮門之南立楯矛是類也。と見え。口訣ふ。白楯者。神社所用而神幸之時以爲圍也。などもあゑ。古事記崇神天皇條ふ。又於宇陀墨坂神祭赤色楯戈。又於大坂神祭黑色楯矛。ともあゑて。猶此事ハ崇

神天皇九年紀ニも見えたり。○又當主汝祭祀者天穗日命是也。さて迄ハ正しく高皇産靈神の神勅ニして。殊更ニ此天穗日命を撰て其御祭祀を司らしめ給ふ所由ハ。能く大己貴命を問和し給ふる御功績ニ依てなるべし。其ハ古事記及神代卷などニハ。天神の天穗日命を天津大御使として天降し坐しゝ。此神ハ大己貴命ニ媚附て復命を申せぐふよしニ見えたれど。祝詞式なる神賀詞ニ。高天能神王高御魂神魂命能皇御孫命爾天下大八嶋國乎事避奉之時。出雲臣等我遠祖天穗日命乎國體見遣時爾天能八重雲乎押別氐。天翔國翔氐。天下乎見廻返事申給久。豐葦原乃水穗國波畫波如五月蠅水沸支。夜波如火炎光神在利。石根木立青水沫毛事問天荒國在利。然毛鎮平天皇御孫命爾安國止平久所知坐之米止申天。己命兒天夷鳥命爾布都怒志命乎副天天降遣天。荒布留神等乎撥平氣。國作之大神乎媚鎮天。大八嶋國現事顯事令事避支とあるて。此時ニ天穗日命ハ天上ニ參昇て復命を奏して。其儘天上ニ留て給へる趣ニ見えて。此後又顯國ニ。天降ぬしゝと。天夷鳥命の。此時ニ天降坐て。亦後て天上ニ還て昇坐しゝことハ。何れの古書にも見えるこなきふし。故此事實を以て天穗日命ハ天上て

留て坐て。天神の詔命のまゝにはゝ。天上の日隅宮を司て給ひ。又天夷鳥命ハ中國の御言向の終一時ゝ。所由あて杵築大社ゝ仕奉始さ〜ゝらむとたばえ〜ゝカ。若一然らむを（をバ。天上ゝまに天穂日命ゝ。何ゝ一て杵築大社の祭祀を司て一といむむ。比一事を以て。已ゝ云ゝことの空一からげるを知るべし。崇神天皇六十年紀ゝ。詔群臣曰武日照命。一云武夷鳥。又云天夷鳥。從天將來神寶藏于出雲大神宮。是欲見焉とあるも。其始ゝ天夷鳥命ゝ係て宣へるゝ思ゝべ一。古事記ゝ。天菩比命之子。建比良鳥命。此出雲國造无邪志國造云々等之祖也。又姓氏錄ゝ。出雲宿禰天穂日命子天夷鳥命之後也。ゝ〜出雲臣同神子天日名鳥命之後也。とあて。出雲氏の祖神ゝ天夷鳥命ゝ係て云へるハ。最も正一き傳狀なて。神名式ゝ出雲國出雲郡同社神阿麻能比奈等理神社とあるゝも思ひ合へべ一。但神代卷ゝ。天穂日命是出雲臣土師連等祖也。又姓氏錄ゝ。出雲臣天穂日命之後也ゝ云ゝるハ。其大本の祖神ゝ係たる傳ゝて。此例もあまどゝ紛〜た傳狀ゝ。是等の事ハ既ゝ先年上木せる。大道本論ゝも云ひ置たまどゝ。ゝもへまバ。天上の日隅宮を以て杵築大社と混ゞ。或ハ天上の日隅宮の祭祀ゝ司て給ふ。天穂日命の御職制と杵築大社ゝ司て一。天夷鳥命の御職制とを混ゞて。あらぬ說のみ多

かるゞ故ゝ。其ゝ明ゝ云ひ別む料ゝ。又こゝに云む置くとのゞ。祝詞式ゝる神賀詞ゝ。是爾親神魯岐神魯美乃命宣久。汝天穂日命波天皇命能手長大御世乎。堅磐爾常磐爾伊波比奉。伊賀志乃御世爾佐伎波閇奉登。仰賜志次乃随爾。供齋仕奉氐とあるハ。出雲國造ゞ其遠祖とよゝ。天穂日命の天上の日隅宮ゝて。事始給へる御職ゝ效て。御兒天夷鳥命より。次々ゝ受繼來さるゞ故ゝ。其大本の御祖ゝ係て壽奏せる稱辭ゝぞあるべき。

○於是大己貴神報曰。天神勅教慇懃如此。敢不從命乎。こゝさよゝて以下ハ。上ゝ出るる高皇産靈神の神勅を。彼大己貴命のかしゝみ奉て。速く御請な申を處ゝて。○吾所治顯露事者皇孫當治ハ。本註ゝ。顯露此云阿羅幡貳とあて。舊事本紀ゝも顯露事とあて。ゆて此顯露事ハ。專ら顯世ゝ現さて。天下を統知給ゝ主宰の御所為を指るゝて。其ハ顯世の神人の。眼ゝ見ゆる事の限ゝ係さて。祝詞式神賀詞ゝ。大八嶋國現事顯事令事避支とあるも是を指て云へるなり。但ー現事と顯事と。ニあるゝハ非ず。同ゞ事かるなたゞ對句ゝー。斯て顯ゝ世ゝ現さる。て。言葉を換て重たるのみゝて。

神人の上ゝ係て當たる例ハ。神代卷ゝ。天照大御神の始て五穀を御覽ー坐ー、處ゝ。是物者顯見蒼生顯見蒼生此云宇都志枳阿烏比等久佐可食而活之也とある。釋紀ゝ引る私記ゝ。顯見者在之義也。人民者是顯然所在。故云宇都之支とあるゞ如ー。神武天皇紀ゝ。朕親作顯齋顯齋此云于倶詩怡破毗。釋紀ゝ。顯者露顯之義也。神代下云。高皇産靈尊。勅大己貴神曰。汝所

治顯露之事宜是吾孫治之云々。此義也などあり。古事記雄略天皇條に。恐我大神。有宇都志意美者。自宇下五字以音。不覺白而云云。故是一言主之大神者。彼時所顯也。と見え。舒明天皇紀に。幽顯とあて。故此訓を以ても。顯をバ古くて世に現きたる人の上に係て假用る來て〜ことを知らきたて。纂疏に顯露之事者人道也。環翠軒宗旨講義に。顯露とハ人道ハ阳也ともいるゞ如し。神代卷鹽土傳に。顯露之事ハ謂治國之政也。神代卷藻鹽草に。顯露之事ハ。國家天下を治平れるの政務を云ふ。神代卷直指詳解に。ひらはにの事ハ國家天下を治平れるを云ふ。そを道に顯陛の二ッあて。人道ハ陽ふ〜て顯ふり。神代卷清地傳に。顯露之事ハ謂治國之政也。顯要抄に。顯露の事とハ。造國天下を治る政事を云ふとも見えたて。さて此時に大己貴命の

捧げ奉て〜顯露事を受繼〜て。天下を知看〜給ふ皇御孫邇々杵尊よて始めて。御代々々の天皇命の天職と申〜奉るハ。天津御祖大神の事依〜給へる。天下の蒼生を率て。主と皇祖天神等の御前を始て。天社國社の神等に仕奉るにあて。其ハ公望私記に。凡神人皆受上天之命而。奉行。其次亦受神人之命而。奉行也。故並訓美舉登と有て。此上天を。所謂天御中主神を指たるに。譬へゞ產靈大神ハ。天御中主大神の詔命を受給ひ。又伊邪那岐大神ハ。產靈大神の詔命を受て。物〜給へる義を云へるに。故是等を以て。御代々々の天皇命の受繼給ふ。天職の大本

の起を知るべし。其ハ垂仁天皇紀ふる倭大國魂神の御誨り。皇御孫尊専治葦原中國之八十魂神とある如く。其八十魂神の御前を嚴重ふ祀治め給ハむ料ふ。常に天下比人民を率て以て萬物の調貢を奉らしを。其を幣帛物として。廣く厚く長く遠く。齋き祀て給ふを云ふなり。

欽明天皇紀ふ。物部大連尾輿。中臣連鎌子。同奏曰。我國家之王天下者。恒以天地社稷百八十神春夏秋冬祭拜爲事とある如く。其神等に仕奉ることハ。即て天下の人民を治め給ふ御政事の本ゝ也。故なり。又孝德天皇大化元年紀り。蘇我石川麻呂大臣奏曰。先以祭鎮神祇然後應議政事とある政事ハ。今も云ふ如く天下の人民を治め給ふ事ふハ。ひを也ど。其規則を議定るりハ。先以て神等を祭鎮置て。然して後り物せむとなり。故此よし。熟熟按ふに。其法則を改て時の宜ふ隨ひ給ふハ何故とふふ。天下の人民を悉く帥て。皇神等ふ仕奉らしむる御爲より起る事ハ云ふも更ら也バ。其大本たる神等の上り係て奏せるなり。其ハ順德院天皇の物し給へる。禁秘御抄ふ。凡禁中作法先神事後他事。旦暮敬神之叡慮無懈怠とある神事ハ。上り云ふ天津御祖大神等の大前を始て。天社國社り仕奉る御祭祀を宣ひ。又佗事とハ其神

事を嚴重に爲む料に。萬の調貢を奉るべき天下の人民を治め給ふ。所謂雜事を指して宣へるなり。故是を以て右の顯露事を知看に。天皇命ハ皇祖天神の御杖代とあるて。天下ふあねと云る蒼生をも萬物をも。悉く令服從て。其調貢物を以て。皇神等に仕奉らむとして。常に教を垂を。又憲を施し坐て。惠給む撫給ふみぞあるける。又天下の蒼生の。天皇命ふ仕奉ることハ。即て皇祖天神ふ仕奉るふて。其御料ふ靈魂を賜て。世ふ生出るにぞあるる。

○吾將退治幽神事ハ。今の版本ふ治幽事とあれど。既く幽の下ふある神字を脫せるふて。其を舊事本紀に。吾將退治幽神事と。顯露事に對て。此も三字あるハ。實ふさるさとふて。古き神代卷ふ。然あるべしふ決けれバ。今此神字をぞ補るるなり。上の高皇產靈神の神勅の處ふハ。神事とあるを。大已貴命の其事を御請し給へる此處に至て。幽事とあるべき謂なり。其故ハ上ふる神事も此處なる幽事も。同じ事なれバ日本書紀の撰者の意として。一事ふ字を換て當べき謂れふ。此理を以てあ。脫字あることを曉る法なれふ。

て其幽神事とハ。大已貴命御親ら天上の日隅宮ふ坐て。司に給ふ幽世の神事を指をハもをよをれをど。姑く版本の幽事をのみ見覺る人の多にる故に。此幽字を假用ゐ來にし例よりに云はむ。神代卷に。是以構幽宮於淡路之洲。ほた乃入于天石窟閉磐戸而幽居焉とあり。又蓋有幽深之致焉。まる古語拾遺ふ。于時天照大神赫怒入于

天石窟閉磐戸幽居焉。武烈天皇紀ニ。幽枉必達なども有て。常陸風土記香嶋郡處ニ。可謂神仙幽居之境。古事記序ニ。所以出入幽顯日月彰於洗目なども見ゆ。けて此幽なバ古より顯世の人に眼ゑ見えぬ。神等の坐ゐ處なけを時ゑ。主と假用ゐ來さる例ゑて。但しこゝよの上ニても。深く隱さたることなどゝも當來れて。其ハ古事記の始ゑ。獨神成坐而隱身也や三處ある隱字と右の幽と專ら同ド義ゑて。又釋紀ニ引る延喜私記ニ。別天神を指て所謂隱坐神等也とある隱も同ド意ニて。舒明天皇紀ゑ幽顯とある。此訓ハ直に幽字を神と云ふ義ゑ見ゐる訓ゐて。けをさバ版本ニ。幽神事とある誤きを。神字を脱して。ゐ幽事とけみあるも。是又神事の義ニ見るも妨なたよ一を知るべし。記傳ニ。幽事ハ此上文ニ神事とあるハ意を以て書る字ニて。神事ハ酉の儘ゑ書る字。幽事ハ書紀舒明天皇紀ニ。幽顯とあて。此訓を以て。幽事を カミゴトと訓むべき事を思ひ定よ。とゐるハ實ニハ誤を。神字を脱きるうとに。心ばの誤ざるなゑ。今の版本ニ。神字を脱きるうとに。心ばの誤ざる故ニ。例の字ニ泥て。酉痛き說も交さるかゑり。偖又古より神事の字を假用ゐ來一例を以て云はむニ。神代卷ゐる同一書の中ニ續に。天兒屋命主神事之宗源者也とゐる是也。神事ハ則大道の根原なるゑ故ゑ。補闕の職たる。此神の司ども給へるものゑて。此外ハ高橋氏文に。供奉神事御膳。すゝ神事之日。又大寶二年七月八日格ニ。宜准供神事勿令濫穢。又延曆十七年十月十一日格ニ。出雲國造託神事多娶百姓女子云云。若娶妾供神事不得已者。同廿年五

月十四日格了。承前神事有犯科祓。同年十月廿九日格ふ。獨賴神事數致闕怠。又弘仁八年十二月廿五日格了。承前神事有犯科祓。又貞觀二年十一月九日格了。遂加決罰神事難濟職此之由。同十四年十二月十五日格ふ。無有行神事並走御馬之處。又元慶五年十月十六日格了。望請早被補任令掌神事。同八年九月九日格了。過祭期神事疎略大概在茲。日本書紀を撰せし養老年中より元慶の頃迄ハ。其閑僅了五十年ばかりなるに。大抵其頃の博士等の漢字を借用ゐたる例格の定てあて。一も違へる事のおきを見るべし。又朝野群載了。但馬國在廳官人等仰下雜事ふ。可勤仕恒例神事事。右國中之政神事爲先とあて。又禁秘御抄了。凡禁中作法先神事後佗事とあるを始め。猶神事の字を假用ゐる處ハ。所在古書了例多くして。擧るに遑あらざるど。ゐゞ其大凡を摘出たるのみなり。然るに其神事とある處ふ。專ら神等の祭祀を指て當ぜる處ハ。只の一處もなることなし。故此例ふ依て忌部正通口訣ふ。汝則可以治神事者。仰德可奉祭祀也。但し此神事の上ふ幽字あるべきを脫せる本ふよれるなり。さて仰德とハ。天神の恩賴を仰ぐを云ふなるべし。下部兼倶抄ふ。幽事ハ神道也可秘密。此も下ふ引る書どもゝ皆幽の下ふ神字を脫せる本ふよりきたるなり。環翠軒宗尤講義に。神道ハ陽也とあり。神道も右の神事を指しなるうて。此頃ハ主と神等を齋き祀る職を指て神道と云ひ。故ひふる殘

以て知るべし。谷重遠、神代巻鹽土傳ふ。神事謂敬神祇之祭也。幽事則神事。舊事紀作幽神事とあり。神代巻清地傳て。神事謂敬神祇之政也。幽妙の事故ふ。亦隱きの事とも云ふ。云々幽事ハ神祇の事なりとも見えて。谷鶯、神代巻藻鹽草ふ。神事ハ神祇を祭祀し寶祚の無窮天下の安泰を禱ると云ふ。神道の本源ハ神皇一躰祭政一致ふして。宇宙を統御在坐事なれども。其事ハ自ら人事の政道と幽冥の神事とを分てて云々。幽事ハ卽ち上文の神事。舊事紀ふ。幽神之事ふ作さりおどあるを以てあ古人の說どもは淳朴なるを見るべし。神代巻直指詳解ふ。神事ハ陰ふして陰也。國家天下を治むる事ハ眼前顯明也。祭祀齋事ハ。陰冥不可測の事也。顯要抄ふ神事を治べしとて。神を祭て帝位の民を治て天下の庶物を治國、玉へバ我影ふ添て守挙らむおどあるも幽の下ふ神字を脫せる本ふ據ての說ふて。斯て治幽神事とある治字ハ古事記大物主神の現身坐る處て。能治我前者云々。然者治奉之狀者奈何。まゝ垂仁天皇紀なる倭大神の御誨て。皇御孫尊、治葦原中國之八十魂神とある治字と同じ意ふて。專ら神等の御前ふ侍て能く祭て治るを云ふ。但し此治字ハ。下たる公民を治るふも通はして用る來し字ふ。此處ふハ正しく御親らより上たる神等の御前を祭て治ることふ當たるを思ふべし。抑大己貴命此顯世を離坐て。御親ハ天上の日隅宮て到て司て給ふ幽神事ハ。此幽神事ハ。天上の日隅宮ふ坐す。大己貴命の御職制ふ。同神とふへども他社て坐、御靈の預給ふべき事ふ非ず。何ふとゝふふ。幽

以て知るべし。谷重遠、神代卷鹽土傳に。神事謂敬神祇之祭也。幽事則神事。舊事紀作幽神事とあり。（神代卷清地傳に。此書を引て。神事謂敬神祇之政也。幽妙の事故に。亦隱れの事とも云に。云々幽事は神祇の事なりとも見えぬ。）谷鶯、神代卷藻鹽草に。神事は神祇を祭祀し寶祚の無窮天下の安泰を禱る を云ふ。神道の本源は神皇一躰祭政一致にして。宇宙を統御在坐事なれども。其事は自ら人事の政道と幽冥の神事とを分てて云々。幽事は即ち上文の神事。舊事紀に。幽神之事に作りたりなどあるを以てあ古人の說ども此淳朴なるを見るべし。（神代卷直指詳解に。神事は陰に〳〵陰也。國家天下を治むる事は眼前顯明也。祭祀齋事は。陰冥不可測の事也。顯要抄に神事を治べ〳〵。神を祭て帝位の長久天下の康寧を祈るを云ふ云々。幽事とは皇孫治國、玉へば我影に添て守奉らむなどあるも幽の下に神字を脫せる本に據ての說なり。）斯て治幽神事とある治字は古事記大物主神の現世に坐る處に。能治我前者云々。然者治奉之狀者奈何。まゝ垂仁天皇紀なる倭大神の御誨に。皇御孫尊、治葦原中國之八十魂神とある治字と同じ意にて。專ら神等の御前に侍て能く祭て治るを云ふ。（但し此治字は。下たる公民を治るにも通はして用る來し字なれども。此處は正しく御親らより上たる神等の御前を祭て治ることに當たるを思ふべし。）抑大己貴命此顯世を離坐て。御親は天上の日隅宮に到て司て給ふ幽神事は。（此幽神事は。天上の日隅宮に坐す。大己貴命の御職制なれば。同神とはへども他社に坐御靈の預給ふべき事に非ず。）何にとゝふに。幽

世ノ在なごら幽世の神等を齋き祀を給ふ御職ならむと所思ふ。但し天上ふて。神等の為し行ひ給ふ御祭は。みな幽神事なる中ふ。此國土ふて也幽世ふある山人等なども。專ら神等を齋ひ祭ることのあるよしは。寅吉物語ふどを始て。何ぐれの書ふも見えたるを思ひ合せべし。其を神武天皇紀に。今以高皇產靈尊朕親作顯齋之顯齋此云于圖詩怡破毗。用汝爲齋主。授以嚴媛之號。而。釋紀ふ兼方案之顯者露顯之義也。神代下云。高皇產靈尊勅大己貴神曰。汝所治顯露之事。宜是吾孫治之云々此義也。とある顯齋事。則幽齋ふ對る語ふて。其幽齋を所謂幽神事なるとは思ふ。纂疏ふ。神事則冥府之事非祭祀牲幣之禮。祭祀牲幣。猶屬顯露事也とあるは。幽世ふ坐を神等の御上ふて其上たる貴神を祀ることは。卽て道の大本ふして。其上たる神等ふ仕奉るは。則下を治る御政事の大本なる由緣を知らざる故ふ。神等を齋き祀ることは。たゞ顯世の人の上ふ。あるまとゝのみ思へるのらの非言也。けゝて其神等を齋き祀を給ふ大己貴命なれば。又天穗日命の齋き祭を給ふことなゞは。世の生學者ら此曾ても辨へ知る儀き事ふあらざれども。眞の道の奥所を學び得て。同じ幽世の中ふも。深淺厚薄尊卑輕重の差別ある由緣を悟を得たる上は。高きは低きふ祀られ。低きは高きを祀て。次々を運び來て。終ふ此顯世ふ貫き出たる道の大本の明を知られて。最も尊く綾を恐き御事と。天の八平手打揚られ。い物ぞかし。但し幽世の神等の御上ふて。又神等を齋き祀を給ふことは。凡人の容易く開べうらむ。見べらぬ事ふまバ。委くは知るべきよしなしといへども。神代巻に。伊邪那岐伊邪那美命の。蛭子と淡嶋を生坐る時ふ。かゝる不良ぬ御兒の生坐るは。何ふある所由

ぞと疑ひまして。天上ふ參昇てて其よりま。天神ふ窺ひ奉て給ひしふ。天神も其所由をまバ知看ぞて。太占之ト事を以て占問給ひて。其所由をかくと誨給ふよ見えたて。此天神ハ主と。產靈大神所謂神漏岐神漏美命ふ係て申せるからむふ。其ハ釋紀ゑ引る私記ゑ。古記稱天神者。以高皇產靈尊爲其最首とあて。此大神の知看給ハぬ事を。占問給ふとして。占問給りしも。必も其上たる。天御中主大神の大御心な本として。占問給ひしとせむ。又太占之ト事の既く心な主とあてしハ。其以前よて神事のあてこと知らさたて。其も神代巻ゑ。天兒屋命主神事之宗源者也。故俾以太占之ト事ゑ而奉仕焉とある。此太占之ト事ハ。幽世ふ坐て。則神事の本なて。其神事ハ云を神の御意を占問ふ術ゑて。萬事の本ふ坐バ。何事よりも既く起てしハ云即て萬事の本ふ坐バ。何事よりも既く起てしハ云ふも愛なゑ。又祝詞式祈年祭詞ふ。天社國社の神等を齋て祀ゑ給ふとを。神漏岐神漏美乃命以氐と此神ふ係て。神漏岐神漏美命の。御親ら天玉串を事依て。其呪詛ふ。又中臣壽詞ふ。天押雲根命の水取ふ參昇ゑ時の神事ふ至る迄。慇懃ふ傳へ給へる事なゑ。ふ合せて推察奉るに。其神事の大本ハ。產靈大神の既く天御中主大

神な齋き祀て給へるゑ始ふて。其神事な次々に及ぼしたるゑ道の大本ふらむとれがえたて。其も公望私記ふ。凡神人皆受上天之命而奉行。次亦受神人之命而奉行也ふ。とある如く。次の神人ハ。貴き神人ふ仕奉るよしを。思ひ合ひべし。古事記ふ。天照大御神。坐忌服屋而令織神衣之時とあて。又神代巻に。天照大神方織神衣居齋服殿とあるゑ故ふ。其神等に。も已命の齋き祀るべき神等のあるゑ故ふ。其神等に奉る幣帛物な織給へるわて。猶天磐屋戸の故事を始め。又御天降の時ゑ。高皇產靈尊の御親ら天津神籬を立て。齋ひ祀給ゑるも。みな幽世の神の爲ゑ行ひ給へる。神事なきバ。所謂幽神事ふ坐るな思ふべし。

幽世の中に淺深の差別と尊卑の階級あるとハ。

古事記の始ふ。天御中主神。高御產巢日神。神產巢日神の終ふ。此三柱神者太獨神成坐而隱身也。とある隱身ハ。既くよて幽世のあてて大御身な隱を處ふ坐ふ徵と云ふべし。但此隱身也ハカクリミニマスと訓むべき書狀ふて。是則加美と

いふ語を延たる言葉かるる字思ふべし。此らとハ大道本論ふも云ひ置たさバ合を見て知るべし。又宇麻志阿斯訶備比古遲神。天之常立神の終あふも。此二柱神亦獨神成坐而隱身也とあるぞ。是又一段の終名ゐ。以上ハ別天神ふて始めより幽世ふ居ふ常として。容易くハ御姿を現し給をぬを以て隱身とハ云へるふて。其を釋紀ふ引る延喜私記ふ。是上所謂隱坐神等也とも見えたて。賴庸云神別記ふ。天常立尊を隱身爾坐と見えたきバ。舊くよりカクリミといふ訓あて。ゐる歟し。又國之常立神。豐雲野神の終ふも。此二柱神亦獨神成坐而隱身也。此二神ハ。此國土とあるべき物ふつきて。生坐る神の始めなること大道本論ふ云へるごと如し。かく三段ふ別て終名ゐるを。ふ階級のむとしか

らぞして。おのづから幽世ふ。淺深厚薄の差別ゐるの故なを。私記一本ふ引る。大倭本紀ふ。國常立尊。國狹槌尊。豐雲淳尊。此三神獨化身藏矣。涅土煑尊。大戸之道尊。面足尊。伊弉諾尊。此四神共化身藏矣。ふ妹神の御名のなきハ。男神の御名の中ふ。包たる傳狀かり。此ふ此獨化ハ。れ社づからゐて居せるの義ふて。身藏を則隱身と同じ義ゐり。斯て紀記ふ此國常立神よて。伊邪那岐神迄を。神代七代とある代も。以前の神等ハ御所爲を。次の神等ハ持分給ふ迄をさして。一代とハ云へるふて。以前の神等の御上ハ其儘ふ幽世の中の幽世をゐて。又次ハ神等の御上ハ其儘ふ幽世の中ハ顯世と

なて。左往右ゆき。次々ふ運び來て。終ふ此顯世ハ出來るるかり。大抵の人ハ。此神代七代ちど云ふ代を。すぎし。又次の神の一御代終てハ。幽世ふ隱ろひ坐思ふ故に。幽世ふ淺深厚薄の差別あることをも思ひ得ばるかて。其ハ同じ幽世ハ中ふあ。尊卑の別あて。階級の隔あるこの故ふ。低き神等よて高き神等に對てハ。容易くハ御言を窺ひ。又ハ大御姿を拜み奉ることあ。叶りぬ故に。其御心を伺ひ奉るべき料ふ。既くより太占之卜事のふるふも思ひ合をべし。ハきバ此大己貴命ハ天上ハ日隅宮ふ坐て。幽神之事を司て給ふ。主と齋き祀るべき神等ハおそしはをこの故るることを能く辨へ。又其幽神之事を司て給ふ大己貴命を。天神の詔命の隨ふ。天穗日命の齋き祀て給ふ。奇く妙かる謂を能く曉るば。其を高皇產靈神の詔命に。幽神之事とあきバ幽神之事の例を以て其義を解の外ハあるべからば。但し此幽神之事を。纂疏ふ。幽冥之事者神道也とあるを受て。度會延佳曰。幽冥の事ハ祭禮などを云ふとあるハ能く此神事の事實を見得るを云ふべし。然るを己ご意のはふまにまふかくと論ひ云ふ。みの撰者の神事の字を當たる意ふ背きある私言ハきバ。今云ふ限りあらじ。若し然らばハ。天上ふ坐て。專ら祭祀を司て。天照大御神の御政事を補佐し給へる。天兒屋命と天太玉命の。皇御孫命ふ屬て。天降坐る後ハ。天上の祭祀をバ。何きれ神の受持給へて とやせむ。此ふ代る神れふくても事の過るご如き輕き職ふハ非ざるに。其を疑ひ思ふ代る人ハ。あやしき事ふ

て。

○乃薦岐神二神曰。是當代我而奉從也ハ。此次の條に。故經津主神武甕槌神。以岐神爲鄕導周流削平。有逆命者。卽加斬戮。歸順者仍加褒美とある是なり。其を大己貴命を。既て此顯世を離て幽世に隱ろひ坐むと思召し給ふの故なり。但し板本に武甕槌神の御名の漏さたる歟一本ハ依て加へたり。纂疏ハ岐神ハ主道路之神薦舉之而爲二神先導也ともあり。

○吾將自此避去卽躬披瑞之八坂瓊而長隱者矣。とある瑞之八坂瓊ハ。顯世の殘し置き給ふ御形代にて。所謂御靈實なるの。出雲風土記母理鄕處の。但八雲立出雲國者。我靜坐國。青垣山廻賜而。玉珍置賜而守詔。故云文理とある玉珍置賜而是なり。纂疏ハ以瑞玉爲鎭也。神代卷鹽土傳の。躬披瑞之八坂瓊服仁惠爲神體とあるに。口訣の。長隱者不見神體神變也とあるの如く。無窮の隱ろひ坐るなり。神代卷ハ。故大己貴命云云。吾以此矛卒有治功。天孫若用此矛治國者。必當平安。今吾當於百不足之八十隈將隱去矣。言訖。卽躬披瑞之八坂瓊而長隱常世鄕者矣。とあるの。今の版本とハ異なり。

○大倭神社註進狀 仁安二年二月十三日。祝部大倭直歲繁の舊記を誌して註進せし。に。引る神代卷ハ。大己貴命云云。吾以此矛卒有治功。天孫若用此矛治國者。必當平安。今吾當於百不足之八十隈將隱去矣。言訖。卽躬披瑞之八坂瓊服仁惠爲神體。神代卷ハ。故大己貴命云云。吾以此矛卒有治功。天孫若用此矛治國者。必當平安。今吾當於百不足之八十隈將隱去矣。言訖。卽躬披瑞之八坂瓊服仁惠爲神體。逆隱と見え。古語拾遺ハ。於是大己貴神。及其子事代主神。亦皆奉避。仍以平國矛授二神曰。吾以此矛卒有治功。天孫若用此矛治國者。必當平安。今我將隱去矣。辭訖。遂隱なども見えたり。

皇孫曰。吾以此矛有治功。皇孫若用此矛治國者。必當平安。今吾當於百不足之八十隈將隱去矣。言訖。卽躬披瑞之八坂瓊而長隱常世鄕者矣。とありて。今の版本とハ異なり。

さて常世郷ハ八十隈手とゝふと同じ事ゝして。主と幽世を指して云ふ言葉ゝなれバ。是等ゝ以ても。大己貴命の現御身ハ杵築大社ゝハ坐ますまじ。彼大社ゝ坐ハすべて此御魂なる事を知るべし。祝詞式神賀詞後釋に。大己貴神現御身ハ八十隈手ゝ隱れ坐て。此顯國ゝハ留て給ハゞ日隅宮ゝ鎮坐ハ御魂也（長胤云。此日隅宮ハ杵築大社ゝ指るゝか。）總て現御身と御靈との差別ゝ知らずハあるべからず。本現御身ハ杵築宮ゝ坐むあるべ。何で八十隈手ゝ隱るゝをハ云べむ。八十隈手ゝ隱るゝとハ此世を去るをゝ云へき云々。杵築宮ゝ鎮坐ハ大己貴命のそべて此御魂ゝをゝ

いふゝ。實にはるゝことをゝなかし。古事記大己貴命の國避ハ此處ゝ。僕者於百不足八十坰手隱而侍。（長胤云此侍ハ。天上の日隅宮ゝ坐て。幽神之事を司て侍ふ意を以て見るべし。）亦僕子等百八十神者。卽八重事代主神。爲神之御尾前而。仕奉者。違神者非也。とある御子神等ハ。神代卷ゝ。大國主神云云。其子凡有一百八十一神とあふ御子ゝなり。既ゝ上ゝも云ふ如く。大己貴命御親らハ御魂ゝなれば此國土ゝ留め置き給ふと雖も。現御身そ天上の日隅宮ゝ到給ふ。其御跡ゝハ現御身の御子。百八十神を殘し置給ふ故に。特ゝ勝て御稜威健き現御身ハ此事代主神を。其御尾前として仕奉らしめ給ふ御掟な

て。若し然らば。猶大己貴命の現御身の杵築大社ハ坐せと云ひ。昔も今も御子神を取締給ふハ。御父神此御上ハあるこゝろ。殊愛み事代主神を撰びて。其事を託し給へる愛ハよりかた徒事となるハや。其ハ。同神とハ。現御身と御魂とハ差別ありて御所爲も等しからぬ。又同じ御魂とハ。既ハ別さて御在所を別み給ふ上ハおのづから別神の如くハなる給ひて。其御所爲も等しからぬるハ。されバ中昔より神等ハ御位を授奉る事の始にて。神等ハ人臣の位階を奉りて。幽顯の隔を失ひ神や人との差別なきハ。少の論ひあるといへども。既み御在所を別み給ふ上ハ。ものとへ同神にても二位を授け奉る社もあり。又五位を授け奉る社もあり。宜なることハ。朝廷より別神別社を御覽し給ふの故ハ證なり。但し位階の輕重のある中ハ。祭神の尊卑ハ應へるもあり。又時の信仰ハよりて其輕重ハ立しもあるべけれバ。あゞ一向ハ云むず。故此謂ハ依て同じ大己貴命と申せども天上の日隅宮ハ坐せ現御身ハ御職制と。杵築大社ハ坐ハ御魂の御職制とを。混ぜ法ハ知ずとハ。但し天上ハ坐せ神等の。此國土迄を御靈事ひ給ふことハ。今愛改てハ。ものあらざれハ。大己貴命一柱を撰て。地球幽政の大主宰とハ。或ハ此國土ハある人々の死たる後の靈魂を悉く主宰し給ハ神などと。よしもなき事を作て設て。愚俗を欺く類ハ。上の天日隅宮を。杵築大社と見誤て。顯露事を知看す天皇命の大宮ハ對へ合せ。又天上の日隅宮の御職制の幽神事を。ハ。今の神代巻ハ脫字ある事をも知らず。其神事幽事を以て。顯露事を知看す。天皇命の御職制に對へ合せ

強て。地球上の事とし給はるれ〜當の非言なて。然るに神事幽事の御職制を持給ふ小大己貴命ハ。天上の日隅宮小坐て。幽神事を司て給ふを何小せむ。猶和魂大物主神。荒魂大國魂神の知看し御職制をも。云ハざれどとめに。明らなるが故ゑ次々小ならぎるを見るべし。

條を立て云ふ

○和魂大物主神のゆゑよ〜其條

神代巻小。自後國中所未成者。大己貴命獨能巡造。遂到出雲國乃興言曰。夫葦原中國本自荒芒。至及磐石草木咸能強暴。然吾已摧伏莫不和順。今理此國唯吾一身而已。其可與吾共理天下者。蓋有之乎。于時神光照海忽然有浮來者曰。如吾不在者。汝何能平此國乎。由吾在故。汝得建其大造之績矣。是時大己貴命問曰。然則汝是誰耶。對曰。吾是汝之幸魂奇魂也。大己貴命曰。唯然。廼知汝是吾之幸魂奇魂。今欲何處住耶。對曰吾欲住於日本國之三諸山。故營宮彼處使就而居。此大三輪大物主神也。

○自後國中所未成者。大己貴命獨能巡造。遂到出雲國乃興言曰。ハ。こゝより以前小。天神の大御心とし〜て。少彦名命を添て兄弟とし〜て。此國土を修理し給へるうゑあて。其勞ハ功竟給はざるを小。彼少彦名命ハ常世鄉所謂幽世ゑ到坐る故小。ゆゑぎるる處々をバ。大己貴神一柱し〜て修理給へるをゆふゑ。○夫葦原中國本自荒芒。至

及磐石草木咸能強暴。然吾已摧伏莫不和順ハ。磐石草木の魂等此現きて。荒びたる時に。彼比々良木の八尋矛を以て。討伏ゝ。令服從給へるゆ云ふ。其と同巻に。然彼地多有螢火光神及蠅聲邪神。復有草木咸能言語。中國者磐根木株草葉。猶能言語。夜者若燎火而喧響之。晝者如五月蠅而沸騰之とある。是等なり。此ハ大物主神の主宰ゝ給ふ物等ふることと。次ゆいふを見べし。祝詞式神賀詞ゝ。豐葦原乃水穂國波晝如五月蠅水沸夜波如火瓮光神在利。石根木立青水沫事問天荒國在利。草之垣葉乎語止。又欽明天皇紀に。天地割判之代艸木言語之時などあるを。みな其魂等の所爲ゝて。常ハ磐石木草水沫などを已の體として。幽世ゆ屬たる魂等の。時々して姿を現ゝて。言問ゝ。荒びたるわゝ。大抵ゆ。其ら を以て。千早振神代とハいふ。萬葉詠ゆ。

五ゆ。可武佐備伊麻須久志美多麻とあるハ。石を稱て。其ハ磐石木草を始めて。世ゆ生とし活る物ハ器物ゆ至るまで。悉く其分々ゆ靈魂のいるよしハ。既ゆ大道本論ゝ。ひ置たまど。猶いはゞ神名式に。大和國山邊郡石上坐布留魂神社名神大月次相嘗新嘗とあるハ。天照大御神の詔命以て。武甕槌神の神日本磐余彦尊ゆ。授け給へる部靈劍と。彼饒速日尊の天上より持降て給へる天璽瑞寶を齎き祭まる事。舊事本紀天孫本紀ゆ見えたり。是ハ某神とも某命とあ申しゝ。き神寶なる故ゆ。布留御魂神とハ申せるゆ。けて。ゆ。の布留御魂の稱ハ。彼十種神寶なゆらゆ。と振動ゆ。よて起きる御名れること。別ゆ

委しく考へたるせる書あれバ。ふハ只其大抵なる云ふみみなる。又神名式小造酒司坐神六座大四座小二座。大宮賣神社四座並大月次新嘗とあるて。相殿の三座ハ神名を擧げ。然るを文德實錄小。齊衡三年九月九日。造酒司酒甕神從五位下。大邑刀自小邑刀自等。並預春秋祭とあるて。又三代實錄小。貞觀元年正月廿七日。奉授造酒司從五位下大刀自神從五位上。同八年十一月朔。造酒司從五位下次邑刀自甕神。準大邑刀自小邑刀自甕神等預春秋二季祭とある甕ふとりふ壺ハ。三十石入かり。土小深く堀居て儘小二尺なく地より拔け出ばるて出たるに。一條院の御時。所由傍小伏しあるけるで。人驚き怪みけるれど小。御門うきに給ひにけるに。三條院の御時大風吹て。彼司倒きふけるに。大刀自小刀自次刀自みれ打割きてけるなどあるを思ふべし。又神名式小。大膳職坐神三座並小。とある中の高倍神社を。高橋氏文を以て。六雁命ありむとりふ說もあるなど信けがたし。其故ハ高ハ所謂美稱字なるを。や。神武天皇紀に。造嚴瓮而敬祭天神地祇。嚴瓮とある瓮も鍋の假字なる。倍ハ鍋の假字なる。此云途背ず天皇往嘗。伊都閉黙とある閉も。鍋の義なる。又祝詞式神賀詞ハ。

かるを思小べし。三代實錄小。貞觀元年三月廿七日。授大膳職醬院无位高倍神從五位下とあるて。全く鍋の靈を祭るなり。又天智天皇十年紀に。大炊省有八鼎鳴或一鼎鳴。或二或三俱鳴。或八俱鳴とある鼎ハ。たゞ漢字を假るたるのみなて實ハ釜のらかて。和名抄小鼎說文云。鼎都挺切和名阿之賀奈倍三足而耳和五味之器也とあるて。又釜古史考云扶甫反上聲之重與輔同和名加奈陪黃帝造也とひのて。鼎と釜とを書分けたるて。又文德實錄小。齊衡二年十二月朔。大炊寮大八嶋竈神。齊火武主比命。次庭火皇神坦授從五位下とある竈神も釜小坐をこと。次小出す內膳司の例を以て知るべし。其ハ文德實錄小。天安元年四月六日。內膳司忌火庭火神並授從五位下とあるを。紀略天德四年十一月十九日の處小。今夜坐內膳司忌火庭火等御神奉遷冷泉院內膳仍權大納言師尹卿以下奉遷之。平野謂釜二口也。庭火謂錡一口也。各有臺長櫃等。衛士持之奉遷院乾方新屋庭火平野別々屋也。安置之後宮主申祝詞とあるハ。本年九月廿三日小。內裏燒亡せし故なり。さて平野謂釜二口也とある釜も庭火謂錡一口也とある錡も共小靈物なるゞ故小。祭きるとのふり。同紀小。永觀元年十月朔日の處に。內膳司平野庭火御竈

釜被盗取了。同十二月廿五日の處ふ。丹勝司平野、御釜如元置本司。件釜先日被盗取畢。仍新所鑄也など見えあて。増鏡ふ。寛治二年十月廿日頃云々。二條油小路ふ火出きぬ。開院どゝ云いぶいぶはの丹おれバ丹勝司燒て。神代よて傳ゆる御釜も燒けそこなはれけるおゞ。ゆゆあはは一き事ぞと申侍る。彼釜むかしハ三ッにわりまる。一ッをバ平野。一ッをバ忌火。一ッをバ庭火と申しける。園融院の御代永觀の頃二ッハ失せふはけて。今一ッ殘り給へるふ。のゝるこふのゆゆできぬるハ。宜しうらぬわざおをとて。神祇官ふ尋らゆ。古き事ども考へらるゝに。平野といひける御釜ハ。陰陽寮ふすゑて。三の殿祭とゆふこと。用ひらゆけけど。中頃よりハ彼祭ハたえぬ。忌火とゆふハ六月十二月御神事の御膳をてうゞけて。庭火ふ常の御膳をつゝうまはるに。かゝれバとたえぶゆ。一き事ゆて。始めてゐをゞふおふをらるゞとあ申し。古きふそこなをたる所ばうてを。直をべきこのゝも。いそい沿ふ定めうゆらゆあて。入道大たれゝゞゆわゞも。ゆるきをなほさるゞばしと。申はゝゝとゞ聞えけるとゆり。又宮丹式に。凡御炊中宮御贖。及祭忌火庭火御竈神平野御竈神料雜物などもあて。神名式ふ。山城國葛野郡平野祭神四座炊名神大月次

新嘗とある社も。主とハ釜を以て祭ゆるならむと。覺えたり。大抵ゆれらを以て。古よゆ器物の靈を祭れるゆと此例の多きゆ知るべきなり。○今理此國唯吾一身而已。其可與吾共理天下者。蓋有之乎ハ。大己貴命御親らの御功績ゆ太く誇て。言舉一給へるよりわて。○于時神光照海忽然有浮來者。曰。如吾不在者。汝何能平此國乎。由吾在故。得建其大造之績矣ハ。己命ハ知看さびとゆゆども。既く和魂大物主神の別ゆて。幽世ふ坐して。守給ゑ一故ふ。大造之績も現ゆ給へるを。其由緣の辱ゆふぞ。露ほぞめ知看ゆふぞく。たゆゝゞ己命ゆ御功績ゆのみ誇て給ひ一故ふ。のゝくゆて元給へるあて。○是時大己貴命問曰。然則汝是誰耶。其

御名を現さむとして。問懸る處にて聞えたるごの如し。○對曰。吾是汝之幸魂奇魂也と。本註に。幸魂此云佐枳彌多摩とあて。釋紀に引る私記に。幸魂是左支久阿良之无留魂也とあるごの如く。此ハ其事其物に廣く渉て。御靈幸む坐し故。何事も幸ひならひるよし此御稱なり。さて奇魂ハ。本註に。奇魂此云倶斯美栁摩とあて。奇靈に。德用を爲し給ふ由の御名なり。然ハあれど。幸魂と奇魂と二有るハ非ず。共に一の和魂なるを。其御活用を稱へて。幸魂奇魂とハ宣へるなれ。其を次に引く神賀詞を以て和魂に坐ますことを知るべし。記傳に。此ハ共に魂

の名にて。幸魂と奇魂と其德用を云ふなり。幸魂と奇魂と二魂ふハあらず。其故ハ若し二の魂なら給二神と現れ給ふべきに。今現れ給ふ神ハ一柱なり。はた出雲國造神賀詞にも。倭の大美和に祀るハ。此神の和魂とこそ見えたれ。是左支久阿良之无留魂也と云ひて。幸魂ハ私記に。字の如く其身を守て幸あらしむる故の名なり。奇魂も字の如く其身を守て。奇靈の德用を以て。萬事を知識辨別て。種々の事業をなさしむる故の名なり。長胤に。幸魂奇魂の事ハ。大抵ハ佐ることなり。幸魂奇魂といふハ。和魂ハ活用を稱へたる御稱にて。其和魂ハ其身を守るばみの料にハ。其身ハ更なり。廣く自他の差別なく。其事其物に幸あらしむる由の御料なり。皇后御親の神功皇后紀に。和魂服玉身守壽命とあるハ。皇后御親の和魂ふハあらず。此ハ綿津見神の和魂にて。三韓の御言向終て還御の處に。亦表筒男中筒男底筒男三神誨へ之曰。吾和魂宜居大津渚中倉之長峽使因看往來船。於是隨神教以鎮坐焉とあて。此ハ神名式に。攝津國住吉郡住吉坐神社四座並名神大月次相嘗新嘗とある是なる歟思ふ合せ。○大己貴命曰。唯然。廼知汝是吾之幸魂奇魂。今欲

何處住耶ハ。其本を大己貴命己命の靈魂より別を給へれ御魂ハひのきど。既ふ別を給へる時をも知看し給を。今此神の御誨ゑりて。始めて其と知看し給ふをハ。實ふ奇く妙ふるこゝをゝぞあをけ。故是を以て其神を坐せ奉らむ處を窺む奉しゑる。此一事を以ても全體を御魂とは階級ハ。幽と顯ほど隔て。其御魂を祭る全體とあて。又其全體ふ祭らひける御魂もひる所由を曉ふべよをて。○對曰。吾欲住於日本國之三諸山。此處を可怜地と撰定給ふ故ふり。はゝ三諸を御室の假字ゑて。御室を宮殿を指てゝふ古語なれバ。此御社の出來ゑる後より及ぼ一きる稱なゝべし。古事記ふ。是時有光海依來之神。其神言。能治我前者。吾能共與相作成。若不然者國難成。爾大國主神曰。然者治奉之狀奈何。答言吾者。伊都岐奉于倭之青垣東山上。此者坐御諸山上神也を。見 迄たて。○故營宮彼處使就而居。此大三輪之大物主神也ハ。此時ゑ大己貴命御親ら大宮を營て。己命の和魂を坐せ奉て給へるなて。今の版本に大物主は三字なたハ脱せるふて。大三輪三社次第に引る神代卷に。此大三輪大物主神是也をひのほを以て補むたて。其は神名式ふ。大和國城上郡大神大物主神社名神大月次相嘗新嘗をひる是れ。和名抄城

上郡に。大神於保無和なゞをひろふも此社を索出ある郷名と見えまゐ。さて此時大三輪ゝ大物主神を齋き祀て給へる。大己貴命の御盛り天下を知看して。最既き時此を。ゝに。祝詞式なる神賀詞ゝ。大穴持命乃申給久。皇御孫命乃静坐牟大倭國申天己命和魂乎。八咫鏡爾取託天。倭大物主櫛瓊玉命登名乎稱天。大三和乃神奈備爾坐云云。皇孫命能近守神登貢置天。八百丹杵築宮爾静坐支を。ひて。こゝを。ゝに依る時ハ。大己貴命の此顯世を避坐る際に臨みゝ。己命の和魂を御親ら八咫鏡ゝ取託て。大三輪ゝ坐せ祀て給へる如く聞ゆれども然ゝ。此を所謂壽詞ある故ゝ。事實を近く引寄て。壽申せるゝゝあるゝ。其故ハ皇孫命能近守神登貢置天やあゝ語ハ。必ずしも神武天皇ゝ。ゝあゝ。大和國の都ゝ時に右の神社ゝ天皇の大宮と閑近きを以て。主と稱へたる詞と聞ゆ。ゝゝ。故ゝゝら後以て。實錄ハ主と事實を傳へ。又稱辭ゝハ飾てありて。少ハ事實ゝ違へるゝもゝゝ。ゝゝゝ。所由を曉るゝゝものゝ。

神代卷に。故經津主神以歧神爲鄕導周流削平。有逆命者。卽加斬戮。歸順者仍加褒美。是時歸順之首渠者大物主神。及事代主神。乃合八十萬神。於天高市。帥以昇天陳其誠欵之至。時

高皇産靈尊勅大物主神。汝若以國神爲妻吾猶謂汝有疏心。故今以吾女三穗津姫配汝爲妻。宜領八十萬神。永爲皇孫奉護。乃使還降之。

○故經津主神以岐神爲鄕導周流削平。有逆命者。卽加斬戮。歸順者仍加褒美。此處小武甕槌神の御名ハ洩さたまど。主たる神の御名を擧て。其他ハ此小包たる。古文の常かさバ。武甕槌神の御名もある意を以て見るべし。是より以前小。大己貴命の此顯世を離て。幽世に隱ろむ坐むとき處に。薦岐神於二神曰。是當代我而奉從也。二神ハ經津主神と。武甕槌神かて。ヤあるを受たる文うて經津主神ハ。大己貴命の申せる如く。岐神を鄕導ゝて。但ゝ岐神ハ。伊邪那岐命の。彼夜見津平坂小て。投棄給へる御杖卽て此神と化給へるれり。大八嶋の國々處々を至らぬ隈なく。責靡こうて。千早振荒振神等を始て。彼磐石木草水沫などの魂等小至る迄。悉く言向和ゝ給へるなり。其ヤ神代卷に。二神遂誅邪神及草木石類皆已平了。とこうる是なり。常陸風土記香嶋郡の處小。豐葦原水穗國。所依將奉上始留爾。荒振神等。又石根木立草乃片葉。解語之。晝者狭蠅音聲。夜者火光明國。此乎事向平定大神從上天降供奉之とあるも。此時のことを云へるれり。○是時歸順之首渠者ハ。史傳小服從ゝ人子之長の義ゝ爲ゝ。ヤこうるが如ゝ。神武天皇紀ゝ。魁帥此云比登誤廼迦彌。とも見えたり。纂疏ゝ。首者魁渠者大也。言諸神之魁帥。神代卷鹽土傳小。首渠統領也。神代卷清地傳小。首渠ハ。猶言頭領長于衆神の意なども見迄るゝ

如し。○大物主神の大ハ最も大なる尊稱ゆて。其物とあ
れ物を統知給ふ故の稱名ふて。故其物とハ主と此神の
御治ふ從ふ物を指して。廣く云ふ言葉なるを。卽て其物
ゑ主宰し給ふ神ふ及ぼしゝる御稱なり。又主をハ其物
等を悉く領く義の語ゆく聞えたるふゞ如し。大三輪三社鎮座次第ふ。
引る神代卷に。此大三輪大物主神是也と見え。祝詞式神
賀詞ふ。倭大物主櫛甕玉命と見え。雄略天皇紀ふハ。大物
代主神ともゆて。又大同類聚方廿四ふ。大神藥倭國大神
大物主神社方。又六十六ふ。三諸藥三輪大物主命かどあ
て。大三輪社ハ。此大物主と
ふふ御名を以て祭ゆる社也。さて此神の御治ふ從ふ物
ハ。同ゞ幽世ふ屬てある神等の中ふも。荒振事我主とを
る神等。又彼磐石草木水沫などゝ魂等に至迄。みふ尋常

の神等ふはゆらげるゞ故ふ。たゞ廣く係て物とハ云へ
るゆり。其例ハ神代卷ふ。然後悉生萬物焉。此ハ其名を擧ぶ一統ふ
云へるふて。たのづかゝ賤むる意を包たり。又撥平葦原中國之邪鬼とゆる是
ゆて。又祝詞式大祓詞ふ。蠱物爲罪とある物。又道饗祭詞
ふ。根國底國與利麤備疎備來物。又御門祭詞ふ。疎夫留物能
但し龍田風神祭詞ふ。百能物知人等とある物ハ。主と神
を指たるふて。其義異なる如く聞ゆるふ似たりとゆ。然
ふもあらゞ。此ハいかゝ
五穀を傷ふ神とのみ。思召れ時ゝことふれバ。是又賤む
る御意より出
たる詞なり。鎭火祭詞ふ。水神匏瓜菜埴山姫四種物能
又毛和物毛荒物。又鰭乃廣物。鰭乃狹物。とある物も賤
ゝたる意ハ同ゞ。又中昔ゝ物語書などゝ。物狂物氣憑物

の態とある物。まゝ歩兵を指て物部と云ふも。此物部を主宰せる長を。物部連と云ふ連ハ部主の義ふて。則大物主をいふと同ト意ふて。皆廣く係てゝふを。起せる言葉なるを思ふ法し。さて其物とは何物ハ何ものゝ。古事記ふ。此葦原中國者。我御子之所知國言依所賜之國也。故以爲於此國道速振荒振國神等之多在とゝある是ふり。又神代巻ふ。至及磐石草木咸能強暴。而然彼地。多有螢火光神。及蠅聲邪神。復有草木咸能言語。とも葦原中國者。磐根木株草葉猶能言語。夜者若燎火喧響之如五月蠅而沸騰。すゝ祝詞式神賀詞ふ。豐葦原乃水穂國波。畫波如五月蠅水沸支。夜波如火瓮光神在利。石根木立青水沫毛。事問天荒國在利とゝある如く。專ら荒ぶる事を常として。道ふ背き物ふ損ふ國神。他神の世ふ守るとハ太く別ふて。又磐石草木水沫などハ魂等ゝ事ハ。其ふ賤を物をハ云へるふて。是則大物主神の御治ふ從ふ物と所思ふて。神祇令義解ふ。地祇者大神云云等類是也とゝある。此國土を常の御在所とし給ふ故ふ。地祇とハ申せるふて。此國土ふ於まくかゝる物等を主宰し給ふゞ故なり。此ハ上ふ擧たる神代巻に。大物主神の始て現を給へる時の御誨ふ。吾ゝある故に。汝ハ汝ハ大己貴命なりいふ也。其大造之績を建るふを得ふを。吾ハ是汝の幸魂奇魂なりと宣へるを思ふ

の態とある物。まゝ、歩兵を指て物部と云ふも。此物部を長を。物部連と云ふ連ハ部主の義ふて。則大物主也ふと同ト意ふて。皆廣く係てゝふを主宰せるて。起せる言葉なるを思ふ法し。さて其物とは何物ハ何ものと云ふに。古事記ふ。此葦原中國者。我御子之所知國言依所賜之國也。故以爲於此國道速振荒振國神等之多在とある是ふり。又神代巻ふ。至及磐石草木咸能強暴。而然彼地。多有螢火光神。及蠅聲邪神。復有草木咸能言語。とも葦原中國者。磐根木株草葉猶能言語。夜者若燎火喧響之如五月蠅而沸騰。まゝ祝詞式神賀詞ふ。豐葦原乃水穂國波。畫波如五月蠅水沸支。夜波如火瓮光神在利。石根木立青水沫毛事問天荒國在利とある如く。專ら荒ぶる事を常として。道ふ背き物を損ふ國神。他神の世を守るとハ太く別かて。又磐石草木水沫などハ魂等ふ。其を賤ゑて物也ハ云へるふて。是則大物主神の御治ふ從ふ物と所思ふて。神祇令義解ふ。地祇者大神云云等類是也とある。ハ。此國土を常の御在所とし給ふ故ふ。地祇とハ申せるふて。此國土ふ於まくかゝる物等を主宰し給ふゞ故なり。此ハ上ふ擧たる神代巻に。大物主神の始て現ゑ給へる時の御誨ふ。吾ある故に。汝ハ汝ハ大己貴命なりふ也。其大造之績を建る丈也を得ゑ也。吾ハ是汝の幸魂奇魂なりと宣へるを思ふ

べし。其幸魂奇魂ふあらざるべ。何で既く幽世ふ坐て。かゝる怪き魂等迄ふはゐてざち給ふべしもいらざるをや。

高橋氏文なる景行天皇の詔ふ。大倭國者以行事負名國奈利。と宣へる如く。太古ハ神人ともに。行事ふ以て名ふ負ふ。例なるふを思ふべし。古事記崇神天皇條ふ。此天皇之御世疫病多起。人民死爲盡。爾天皇愁歎而。坐神牀之夜大物主大神。顯於御夢曰。是者我之御心。故以意富多々泥古而令祭我前者。神氣不起。國安平。と宣へるあ。かゝる病を知る魂等に至迄主宰給ふの故なり。但此神のかゝ怪き物ふ主宰給ふハ。神祇令義解ふ。季春鎮花祭。謂大神狭井二祭也。在春花飛散之時。疫神分散。而行病。爲其鎮遏。必有此祭。故曰鎮花とあるを思ふべし。かゝる由緣をも知ずして。大物主神を以て。疫神の如く云ふ類ハ。論ふ可も足らぬ非言なり。崇神天皇十年紀ふ。是後倭迹々日百襲姫命爲大物主神之妻。然其神常晝不見而夜來矣。倭迹々姫命語夫曰。君常晝不見者分明不得視其尊顔願暫留之。明旦欲覲美麗之威儀。大神對曰。言理灼然。吾明旦入汝櫛笥而居。願無驚吾形。爰倭迹々姫命心裏密異之。待明以見櫛笥。遂有美麗小蛇。其長大如衣紐。則驚之叫啼。時大神有恥。忽化人形。長胤云ふこれらを以ても。御魂の御所爲の殊了奇きよゝを知る侍。謂其妻曰。汝不忍令羞吾。吾還令羞汝。仍跣大虛登于御諸山。爰倭迹々姫命仰見而悔之急居。急居此云蒐岐于。則箸撞隱而薨。乃葬於大市。故

時人號其墓謂箸墓也。是墓者日也人作。夜也神作。故運大坂山石而造。則自山至于墓人民相踵。以手遞傳而運焉也。

○

ある。此百襲姫命ハ。萬物の首渠者とまし。大物主神の御妻なる故ゝ。其御治ゐ從ゑ坐る神等ゝ寄集ひて。御墓を造て給へるならむゆゑたゞえあり。究かゝ。箸御墓ハ今箸中村と小ふふあて。大石小石を以て。五段ゐ築立たる。最も嚴しき御墓ゝて。大三輪社よりて八九町傍ゐあてとぞ。○

事代主神ハ。事知主の義ゐて。釋紀ゐ。代者知也とあるゞ如し。此神ハ神代卷に。時事代主神謂使者曰。今天神有此借問之勅我父宜當奉避。吾亦不可違。因於海中。造八重蒼柴籬柴此云府璽。蹈船枻船枻此云浮那波多。而避之。使者既還報命やあて。又古事記に。故爾遣天鳥船神徵來八重事代主神而問賜之時。語其父大神言。恐之此國者。立奉天神之御子。卽蹈傾其船而。天逆手矣於青柴垣打成而隱也。とのて。此神ハ大已貴命よりも。最既く此顯世を離て。幽世に隱ろむ坐るゐ。又こゝゐ現世坐して大物主神ゆ共ゐ。天上に參昇りハ。何ゐと誰も疑ふ所ゐきどと。既ゐ隱ゐひ坐るゐ現御身ゝて。此段ゐ現世給へる。御魂のかゐゐるを。ゆ決し。古事記大國主神の國避條ゐ。亦僕子等百八十神者非也とあるに。より。あて。げゐ聞ゆきども。此ハ專ら現御身のかゐゐ係て。大已貴命の數多ある。御子神等を治め給ふ。御職ゐ係たる御掟ゐ。彼と此ゆを元より別ゐて。祝詞式神賀詞ゐ。乃大

穴持命乃申給久云云。事代主命能御魂乎宇奈提爾坐云云。皇孫命能近守神登貢置天。とあるも。例此時代を近く引寄たる壽詞ゐて。實ハ國避ル際より最既く此宇奈提小鎮坐を御魂の御所爲なるゑふ疑ふ。其を已命の在す高市縣ゐ八十萬神ゑ集へ給ゐを思ゑ合を侍。さて宇奈提ハ。和名抄大和國高市郡ゐ雲梯宇奈天節用集に。雲梯とある此處なり。萬葉十三ゐ。不想乎想常云眞鳥住卯名手乃杜之神思將御知とゐるも。此神ハ事知主ゐて。言葉を詐て飾ることゐを。甚く憎給ふ神ゐる故ゐ。此神ゐ係てよゑるなはべし。神名式に。大和國高市郡高市御縣坐鴨事代主神社大月次新嘗。とゐるハ。此宇奈提杜ならむとれば。忘ゐて。但一葛上郡ゐ。鴨都味波八重事代主神社二座。並名神大月次相嘗新嘗などもあゑど間遠くして。此段の故事ゐよし。さて此高市御社ハ。今雲梯村ゐあゐと土人ハ云へる。實に能く古典の傳ふ應へて。古史傳に。高殿村とある ハ不審ゐ。天武天皇紀に。時高市郡大領高市縣主許梅。儵忽口閉而。不能言也。三日之後方著神以言。吾者高市社所居名事代主神。又年佐社所居名生雷神也。乃顯之曰。於神日本磐余彦天皇之陵。奉馬及種々兵器。便言吾者立皇御孫命之前後。以送奉于不破而還焉。今且立官軍中守護之。且言自西道軍衆將至之宜慎也。言訖則醒矣。故是以

偃遣許梅而祭拜御陵因以奉馬及兵器又捧幣而禮奉高市身狹二社之神然後壹岐史韓國自大坂來故時人曰二社神所教之辭適是也とあるハ專ら大己貴命ハ言掟給ひしゝ如く皇御孫命の近き守神とおりて天武天皇の御軍を守助け給へるを思ふべし此て高市社ハ右ふ〻ふ事代主神ふて年佐社ハ神名式に同郡年佐坐神社大月次新嘗

をある是ふて猶此事代主神を祭る御社ハ諸國ゑ多くゆて御稜威健くたはしゆを多かれど既ふ御魂別きて御社を別ふし給ふ上ハ別神の如くふ社ハ此處に用なし若し其我引上る時ハ他社ふ坐を神ハ御稜威を奪ひ奉ふ似たる所爲ふて人ともかゝこれ事なきバ此處ふハ洩せるなり但し世の俗學者等ハ是らの差別をバ夢ふも知らぜして也ともにきバ他社の御稜威を引つけて己が國ふ入れ恐ふ〻ひしゝゆふ故に殊更ふ斷て置くとのぞ

○乃合八十萬神於天高市帥以昇天陳其誠欵之至をある八十萬神ハ上ふ八ふ大物主神の御治ふ從ひ坐る數多ハ神等魂等ふ〻ふなり神代卷に于時八十萬神會合於天安河邊故會八十萬神於天高市また時有八十萬神皆不得目勝相問又高皇產靈尊勅八十諸神曰などゆて何ハも其數の多きを指して八十萬とも八百萬ゆ云ふ例ふて此處なる天高市ハ天上ふゆる高市ふハ

あらず。大和國は高市郡なるとは。既に古人の云へるが如し。其ハ神名式ニ。大和國高市郡。天高市神社大月次新嘗。を云る此處なり。但し此御社の祭神ハ。則事代主神なりとぞ。大和志に。曾我神社、南。今稱ス八幡ト相傳フ神代ニ八百萬神ヲ會ツドヘテ合于天高市ニ卽チ此ナリとあり。但し曾我神社ハ。神名式ニ。同郡宗我坐宗我都比古神社二座。姓ニ大月次新嘗とある是なり。纂疏に。八十萬神、皆統屬スル於大物主神ニ也。高市ハ在ニ大和州ニ今爲ル郡名ト。なども見えあり。神代卷鹽土傳ニ。大己貴父子、神帥テ八十萬從神ヲ以テ參ル朝ニ京師ニ致ス其忠誠欵密之極ヲ。留テ其魂於君邊ニ。以テ爲ス城上郡大神大物主社ト。とありて。大己貴命現御身と。和魂大物主神とを混じあるハ誤なれど。大三輪の大物主神と見たるハ。動きかたし說なり。又神代卷藻鹽草に。八十萬神ハ。本大物主命ニ隸屬し。今天朝ニ歸服する諸神を云ふ。神代卷清地傳に。首渠ハ猶ル言ガ頭領ト。長ス于衆神ヲ意云云一ハ眞實也。無虛僞の心。爰ニハ忠義の趣

致盛の事。寔ニ至ル極れりの躰。加之其魂を君邊ニ留テ。永く云云守りあまはむ御存念亦難有のらずや。城上郡一宮大神大物主神社などあるも。此時ニ和魂を大三輪ニ留め給へるにハあらず。其御魂を留め給へるハ。上ニ云へる如く。最も既き時のことなれども。此段ニ出たる大物主神を。三輪ニ神かりと見たるハ。諸なる說ふこそ。

ばかり此處ハ大三輪社ニも。高市社ニも閑近き處れる故に。此處を撰て八十萬神等を召し集めて。其を悉く率て。天上ニ參昇りて。天神の大前ニ其誠欵之至を陳し給ふるなり。然云ふよしハ。大己貴命ハ。此前段ニ御親ら瑞の八坂瓊を披て長隱矣をある文のたし續ニ出ばバ。既に隱ル給へる大己貴命の。又此處に至て再び現ル給ふ。くあらずや。殊に長隱矣とまらるをや。此一事

を以てもくに現ぜ坐るハ。大三輪ゐまゐ和魂大物主神ゐて。大己貴命ゐハゐらざるくを悟る法ま奈カ。○時高皇產靈尊勅大物主神。汝若以國神爲妻。吾猶謂汝有疏心。故今以吾女三穗津姬配汝爲妻。古事記ゐ。大國主神の亦名を多く舉たる中ゐ。大物主とハふ御名の見えざるハ。和魂の御名ゐて。亦名ゐゐらざる故に洩せるゐもあらむゐ。然るゐ神代卷に。大國主神。亦名。大物主神。古語拾遺に。大己貴神。一名大物主神。ま大播磨風土記志深里の處ゐ。大物主葦原志許乎命などある大物主ハ正しく。大己貴命の亦名とハ。聞ゆ。ま。此段ゐ出たる。三輪ゐ坐ま。和魂大物主神とハ。とよゐ別ゐカ。思ひ惑ふことなかれ。其故ハ。大己貴命ハ。既く須佐之男命の御依しのゐゐまゐ。須世理比賣命を嫡妻として。ゐるる上ゐ。重ねて高皇產靈神の御女ゐ御后に給ふべくもあらぢるをや。纂疏ゐ皇祖配女者猶後世列侯尚公主之意也。を見えゐゐ。斯て此大物主神ハ未だ御嫡妻をバ。持給ハぬことゝ聞えて。汝若以國神爲妻とゐる。若。字ゐ最も其意ゐる詔命なるを思ふべし。今此神ゐ。高皇產靈尊御親らの御女ゐ配せて。如此重く御饗應給へるハ。所謂大物主をゐして。天下の荒ぶる神等御魂等を問ひ和して。服從へ仕奉らしめ給へまて賞ま賜物とこそなれ。さて此女神を。神名式ゐ。大和國城下郡。村屋坐彌富都比賣神社大月次相嘗新嘗。ゐある是ゐ。今大三輪社よゐて一里ぞ。ゐ隔てゐる杜屋村と云ふにあるとぞ。但し今此神の坐ゐ地ゐ。杜屋村と云ふを以て考ふるゐ。古書ゐ村屋とあるハ。若くハ杜屋の寫誤ゐてもゐらむゐ。猶よく考ふべし。斯て此神の坐ま城下郡も。大物主神ま坐ゐ城上郡も。古ハ磯城

の一郡と聞ゆ也ど。城上下と別也ーハ。何時れ頃かるゝや。大抵中昔れうとれるべー。其を此御社も大三輪社に近き處小鎮て坐を能々思ひ合をべー。又同郡小。村屋神社も見えあて。吾徒波遊玄包云。當社も右の杜屋村小あリと云へて。天武天皇紀の上小引るはー續う。又村屋神著祝曰。今自吾社中道軍衆將至。故宜塞社中道。故未幾日廬井造鯨軍自中道至。時人曰。卽神所教之辭是也。軍政既訖將軍等舉是三神教言而奏之。卽勅登進三神之品以祠焉。とのて。此三神とハ。上小出ある事代主神と。生雷神と。此三穗津姫命うて。共に天武天皇の御軍を守て給へるおウ。○宜領八十萬神永爲皇孫奉護。とある八十萬神ハ。上ゐへる八十萬神等御魂等小て。其神等を主宰ーて。無窮小皇御孫命を守奉也と。ふ詔命なて。古語拾遺小。復勅大物主神宜領八十萬神永爲皇孫奉護焉。ふども見えあて。但ーこの詔命ハ。ゐともいをあ大ふる事なをバ。此神を以て幽政の大主宰と云むも。妨げなきほどれを。をれて。其ハ古よウ大三輪小大神の字を當てあるも小緣の事にハあらぢるふて。○乃使還降之。をハ。此顯國小還降らーを給ふゐて。神名式に。大和國城上郡。大神大物主神社名神大月次相嘗新嘗。とある。此御社小到て給ふべをハ云ふも要なウ。其ハ最既く已命の乞ハー給へるはふまん。大已貴命の御親ら齋き祭て置き給へる我思ふべー。神名式う。大和國城上郡狹井坐大神荒魂神社五坐鍬叡。とある社を。令集解小。狹井者大神之靈御魂也。とある如く。和魂をまん大三輪神より。又荒魂の別也給へるふどハ。特小御魂の太く健くれを

よれゞの故かるゝ
ゝと勿論あれて。ゆゑに此御社ハ今三輪村ゝゆゑて。官幣大
社に列て給へて。大三輪三社鎮座次第ゝ。奥津磐座大物
主命。中津磐座大己貴命。邊津磐座少彦名命とゆゑて。但一神名
式ゝハ。大物主神を一座と一て載たゝバ。
相殿神ハ。後ゝ祭添へたるにもあるべ一。崇神天皇七年
紀ゝ。是時神明憑倭迹々日百襲姫命曰。天皇何憂國之不
治也。若能敬祭我者必當自平矣。天皇問曰。教如此者誰神
也。答曰。我是倭國域内所居神名爲大物主神。時得神語隨
教祭祀。然猶於事無驗。天皇乃沐浴齋戒潔淨殿内而祈之
曰。朕禮神尚未盡耶。何不享之甚也。冀亦夢裏教之。以畢神
恩。是夜夢有一貴人對立殿戸。自稱大物主神曰。天皇勿復
爲愁國之不治。是吾意也。以吾兒大田々根子令祭吾者則
立平矣。亦有海外之國自當歸伏。長胤云。此ハ五年紀ゝ。國内に多ゝ疾病起て。民
ゝ死亡する者半ゝ過るよ一見え。又六年紀ゝ。百姓流離。或有背叛其勢難以德治之。などある也宜へるかて。秋
八月癸卯朔己酉。倭迹速神淺茅原目妙姫。穂積臣遠祖。大
水口宿禰。伊勢麻績君。三人共同夢而奏曰。昨夜夢之有一
貴人誨曰。以大田田根子命爲祭大物主大神之主。亦以市
磯長尾市爲祭倭大國魂神主。必天下大平矣。天皇得夢辭
益歡於心。布告天下。求大田田根子。卽於茅渟縣陶邑得大
田田根子而貢之。天皇卽親臨于神淺茅原會諸王卿及八
十諸部而。問大田田根子曰。汝是誰子。對曰。父曰大物主大

神。母曰活玉依媛陶津耳之女。亦云奇日方天日方武茅渟祇之女也。天皇曰。朕當榮樂。乃卜使物部連祖伊香色雄爲神班物者吉之。又卜便祭佗神不吉。長胤云。此ハ八まゝ。大田々根子命を神主として。己命を祭らざる前なるゆゑ故ゝ。冬十一月壬申朔己卯。命伊香色雄而。以物部八十手所作祭神之物。卽以大田田根子爲祭大物主大神之主。又以長尾市爲祭倭大國魂神之主。然後卜祭佗神吉焉。便別祭八十萬群神。仍定天社國社。及神地神戸。於是疫病始息國內漸謐五穀旣成百姓饒之。などゝあるハ。實に御稜威〳〵るた大神かゝ穴ゝ。

姓氏錄山城國神別ゝ。神宮部造、葛城、猪石、岡、天降神。天、磯、城、瑞、籬宮御宇天皇御世。天命之後也。六世孫吉足日命。

下有災。因遣吉足日命。令齋祭大物主神。災異卽止。天皇詔曰。消天下災。百姓得福。自今以後。可爲宮能賣神。仍賜姓宮能賣公。然後庚午籍注神宮部造也。とある瑞籬宮ハ。則崇神天皇御代のこゝかゝ。又大三輪三社鎭座次第に。腋上池心宮御宇天皇御世。神明憑吉足日命曰。吾國造大己貴命也。大初己命之和魂取託八咫鏡。名曰大物主櫛瓊玉命。鎭座大三輪神奈備。とある腋上池心宮ハ。孝昭天皇の御代かゝ。然るに姓氏錄にある吉足日命も。同人の如く聞ゆ。ゆゑども時代の違へるハ何なるゝゝゝゝ。又八年紀ゝ。以高橋邑人活日爲大神之掌酒。掌酒。此云佐介弭苦。ゝゝゝ。同十二月紀ゝ。天皇以大田田根子令祭大神。是日活日自擧神酒獻天皇。仍歌之曰。許能瀰枳破。今云ふ。此神酒者かゝ。和餓瀰枳那羅孺。今云ふ。非吾神酒なゝ。椰磨等那殊。今云ふ。大和爾坐也。於朋望能農之能。今云ふ。大物主のなゝ。介瀰之瀰枳。今云ふ。醸志神酒かゝ。伊句臂佐伊句臂佐。今云ふ。活久かゝ。如此歌之。宴

于神宮。卽宴竟之。諸大夫等。歌之曰。宇磨佐開。今云ふ美酒なり。彌和能等能々。今云ふ三輪之殿之なり。阿佐妬理毛。今云ふ朝戸爾毛ふり。伊第氏由介那。今云ふ出而將往れり。彌和能等能渡塢。今云ふ三輪之殿戸乎なり。於茲、天皇歌之曰。宇磨佐階。今云ふ上に出。彌和能等能々。今云ふ上に出。阿佐妬理毛。今云ふ上に出。於辭寐羅箇禰。今云ふ押開禰なり。彌和能等能渡塢。今云ふ三輪之殿戸乎なり。卽開神宮門而幸行之。所謂大田田根子。今三輪君等之始祖也と見えたり。古事記崇神天皇條に。是以驛使班于四方。求謂意冨多多泥古人之時。於河内之美努村見得其人貢進。爾天皇問賜之汝者誰子也。答曰。僕者大物主大神。娶陶津耳命之女。活玉依毘賣生子。名櫛御方命之子。飯肩巣見命之子。建甕槌命之子。僕意富多々泥古白云云此謂意富多々泥子人所以知神子者。上所言活玉依毘賣其容姿端正。於是有神壯夫。其形姿威儀。於時無比。夜半之時。倏忽到來。故相感共婚供住之閒。未經幾時。其美人妊身。爾父母怪其妊身之事。問其女曰。汝者自姙。無夫。何由姙身乎。答曰。有麗美壯夫。不知其姓名。毎夕到來供住之閒。自然懷姙。是以其父母欲知其人。誨其女曰。以赤土散床前。以閇蘇紡麻貫針刺其衣襴。故如敎而旦時見者。所著針麻者。自戸之鉤穴控通而出。唯遺麻者三勾耳。爾卽知自鉤穴出之狀而。從糸尋行者。至三輪山而。留神社。故知其神子。故因其麻之三勾遺而。名其地謂美和也。此意富多多泥古命者。神君鴨君之祖と見えたり。此傳による時ハ。大物主神。其御子櫛御方命。其御子飯肩巣見命。其御子武甕槌命。其御子意富多多泥古命なり。大物主命五世孫。意富多多泥子命となりて少し異なり。又姓氏録大和國神別に。大神朝臣。素佐能雄命六世孫。大國主命之後也。初大國主神。娶三嶋溝杭耳之女玉櫛姫。績苧係衣。至明隨苧尋覓。經於茅淳縣陶邑。直指大和國三諸山。還視苧遺唯有三縈。因之號姓大三縈なども見えたり。又賀茂朝臣。大神朝臣同祖。大國主神之後也。大田々禰古命孫。大賀茂都美命。一名大賀茂足尼。奉齋賀茂神社也とあり。又攝津國神別に。神人。大國主命五世孫。大田々根子命之後也ともあり。依て姓氏録に。大國主命とあるハ。何れも三輪神を指たるなれバ。正しくハ大物主神を

ゐるべきを。全體と和魂との差別なき紛したる傳へ狀かを。其故ハ大田々子古命ハ。大國主神の御子なるを思ふべし。又大和國三輪ふ坐を大物主神の御子ふハあらじ。部に。三歳祝。大物主神五世孫。意富太多根子命之後也者。とゐるハ正しき傳へざはれを。

又崇神天皇十一年紀ふ。是歳異俗多歸國內安寧。をゐを。此時ふ始めて大伽羅國とゐふ。外國の人等の多く來しふて。此を外國人の皇國ふ服從ひ來し始めに。上ふ引る崇神天皇七年紀ふ。大物主神の御誨に。有海外之國自當歸伏。と詔へることを如く。少も此御誨ふ違はぎるハ。既く其事を知看し給ふ故ふを。又神功皇后紀ふ。三韓の役を議定を給へる處ふ。時軍卒難集。皇后曰。必神心焉。則立大三輪社以奉刀矛矣。軍衆自聚。

などゐるも。みな大物主と坐して。特に御稜威健くれを。しはをが故ふを。ゐをもの。いとも尊を大神ふらびや。其を此神の始めて現を給へる時ふ。大己貴命ふ對を。由吾在故。汝得建其大造之績矣。と詔へるを以ても。御所爲の高く尊く坐を事ハ知られを。況て他國の人等ふ至迄。皇大御國ふ令歸順給ふかどハ。全く高皇產靈神を大詔命のまふはに。皇御孫命を無窮ふ護を奉るにぞあをける。文德實錄ふ嘉祥三年十月乙巳朔辛亥。大神大物主神授正三位。仁壽二年十二月乙亥。加大和國大神大物主神從二位。三代實錄ふ。貞觀元年正月廿七日。勳二等

大神大物主神奉授從一位同年二月朔大和國從一位勳二等大神大物主神奉授正一位などあて。〻既く極位に進み給へるをも思ひ合へべし。

○荒魂大國魂神はゆゑよしの條

垂仁天皇廿五年紀小。是時倭大神著穂積臣遠祖大水口宿禰而誨之曰。太初之時期曰。天照大神悉治天原。皇御孫尊專治葦原中國之八十魂神。我親治大地官者言已訖焉。然先皇御閉城天皇雖祭祀神祇。微細未探其源根。以粗留於枝葉。故其天皇短命也。是以今汝御孫尊。悔先皇之不及而慎祭則。汝尊壽命延長。復天下太平矣。時天皇聞是言則俾中臣連祖探湯主而卜之。誰人以令祭大倭大神。卽淳名城稚姬命食卜焉。因以命淳名城稚姬命定神地於穴磯邑。祠於大市長岡岬。然是淳名城稚姬命。既身體悉瘦弱以不能祭。是以命大倭直祖長尾市宿禰令祭矣。

○是時とハ。垂仁天皇の廿五年小起て。廿六年の九月天照大御神を。始めて伊勢國小坐せ奉て。時を仕へて云ふ。其ハ此前文小。天皇以倭姬命爲御杖。貢天照大神鎭座於磯城嚴橿之本而祠之。然後隨神誨以丁巳年秋九月甲子遷于伊勢國渡遇宮とひるを受たるなり。但一版本

ふ冬十月甲子とあるハ。九月の誤ふれバ。今ハ黒羽本等に依て改めつ。村田清昌云。垂仁天皇廿五年三月ふ。天照大御神を倭姫命ふ託奉てしより。鎮て坐せべき地を求を給ひて。國々を巡て坐して。同天皇の廿六年九月十七日ふ。今の五十鈴の川上ゑ鎮めまつりなて。但一丁巳年ハ廿六年ふて。同年の十月甲子ハ誤てなること。長暦及び。天朝無窮暦を以て推考せれぞ。此年の十月朔ハ丁丑ふて甲子あ一。九月朔ハ戊申なるバ。甲子ハ則十七日ふ當きゆ。委しくハ神宮の御祭日の考證を見べし。○倭大神ハ。皇大御國の大神と云ふ義の尊稱ゑて。實ゑ大國魂神を稱へて然申せるゆゑて。其ゑ崇神天皇六年紀ふ。先是天照大神和大國魂二神を共祭於天皇大殿之内。然畏其神勢共住不安。故以天照大神託豐鍬入姫命祭於倭笠縫邑。仍立磯堅城神籬。神籬。此云比莽迦岐。亦以日本大國魂神託渟名城入姫命令祭。然渟名城入姫髪落體痩而不能祭とひのて。代て日本大國魂神とハ。則此字の義ふて。皇大御國則大八嶋の國々嶋々處々の國魂神等。ゆべてを主宰し給ふよし此御名ゆゆ。其ゑ高橋氏文なる景行天皇の詔ふ。大倭國者以行事負名國利。ゆゑなる字思ふべし。但一此崇神天皇の大御代ふ。天照大御神を始めて。此大國魂神ふ至るまで。ふとやむごとなき御守神等を。宮中ゑ離て別地に坐せ奉給へる所由ゑ熟々考るに。古語拾遺神武天皇の御代の事ゑ誌きる處ふ。當此之時。帝之與神。其際未遠同殿共殿の狀。以此爲常。故神物官物亦未分別。とある如く。神武天皇の頃ハ。神等と天皇命との御位も近くまし一ほし一おて。又至于磯城瑞垣朝。漸畏神威同殿不安。とあて。次々に御代ゑふるまに。ハふふ。天皇命ハまして顯世の人となり給へる故ふ。御位も稍隔て。おのゆゑ同狀共殿ふ坐を奉ることをかしこみて。其ゑ安からぎ思ゆゆ。御心ハ出來まつりて。是即て神等の幽

ふ量定め給ふ御心あて。其ハ皆神等の御誨ふまりて。出御杖代をも神地をも定め給へるを以て知るべし。雲風土記飯梨郷、處ふ。大國魂命天降坐時當此處而御膳食給。故云飯成とゐるハ。何時の頃ぢ事ふや。最既き時ぢとあるべし。大倭神社註進狀ふ。此ハ仁安二年二月十三日。祝部大倭直歳繁の誌をる註進狀ふて。家牒曰。腋上池心宮御宇孝昭元年秋七月甲寅朔。遷都於倭國葛城丁卯天皇夢有一貴人。對立殿戸自稱大己貴命曰。我和魂自神代鎮三諸山而助神器之昌建也。荒魂服玉身在殿内而爲寶基之衛護。卽得神教而。天照大神倭大國魂神丞祭於天皇大殿之内。とある茂以て考ふるふ。此大國魂神ぞ。大己貴命の荒魂ぞ坐て。最も既くぞて。天皇命ぢ大御身に屬て。大殿之内ふ在〳〵ぞ。此時の御誨ふ依て。孝昭天皇ぢ御代より。天照大御神ぞ丞て。齋き祀て置給へる趣ふて。古事記ふ。故其大年神娶神活須毗神之女伊怒比賣生子大國御魂神とハも とより別神れて。思ひ惑ふ事勿也。○著穂積臣遠祖大水口宿禰而誨之曰ハ。此姓ハ古事記神武天皇條ぞ。宇麻志麻遲命。此者物部連。穂積臣。采女臣。祖也。とゐて。又孝元天皇條ふ。穂積臣等之祖。內色許男命と見え。姓氏錄左京神別に。穂積朝臣、右上同祖神饒速日命五世孫。伊香色雄命之後也とゐて。和名抄攝津國嶋下郡ふ。穂積郷あて。又神鳳抄ふ。尾張國穂積ふどもゐり。又穂積臣、伊香賀色雄男。大水口宿禰之後也とゐる是ふて。崇神天皇七年紀ぞ。

倭迹速神浅茅原目妙姫。穂積臣遠祖大水口宿禰。伊勢麻績君。三人共同夢而奏言。昨夜夢之有一貴人。誨曰。以大田田根子命爲祭大物主大神之主。亦以市磯長尾市爲祭倭大國魂神主。必天下太平矣。とゝ。大水口宿禰と同じ人なるべけれど。崇神天皇七年と。此垂仁天皇廿五年と兩度は御誨ゝ。彼と此とは別なれば。御誨ハ幾度もゝなるべし。○大初之時期曰ハ。何時の頃を指して宣へるかゝ。際やのかゝ知てゞたきに似たれども。此そ決く大己貴命の國避坐る頃に。彼大物主神。事代主神などは如く。部屬の國魂神ゝどを集へ帥て。天上ゝ參昇て。契約給へるまゝとは。あてゝを。幽世の神等の御所爲なれバ。古傳かハ洩たるゝれべし。○天照大神悉治天原ハ。但ゝ此國かてハ。高天原とゝへども。天上かハてハ。ゝゞ天原とゝ云ふ例也。心得置べし。神代卷かゝ。伊邪那岐命の詔命かゝ。天照大神者可以治高天原也。又古事記に。卽其頸珠之玉緒母由良邇。此四字以音下效此。取由良迦志而。賜天照大御神而詔之。汝命者所知高天原矣。事依而賜也。とゝる如く。此大御神の。高天原を悉く知看ゝ給ふまゝとゝハ。大御父とは。伊邪那岐命の大御依ゝ。ゝて。無窮かゝ定まるゝを受て。かくハ期給へるゝ。○皇御孫尊專治葦原中國之八十魂神ハ。天皇命の常かゝ天津御

祖大神等を始めて。天社國社に坐せ。八十魂神を重く祭て治め給ふとは。神漏岐神漏美之命の授給へる。道の大本にして。天職は第一にぞ。其神等を嚴敬く齋き祀て。又其社々を遠く長く保ち給へる御料に。天下の人民を惠給ひ撫給むて。調貢物を奉らしめて。其を安幣帛の足幣帛と備へ給ふ御職なるとは。上に云へるが如し。但し此處に。殊更に。魂神とはなるを以て。熟々考るに。天神國神等の現し御身は。大抵幽府に坐て。顯國の社々に坐せは多くは。其魂神なるが故なるべし。○我親治大地官者言已訖焉は。則大和坐大國魂神。亦名大地主神の御職制にて。其大地官は。いと大なる事は極なり。其を大八嶋の國々嶋々處々に。在てとはゆる。國魂神則地主神を。悉く主宰し給ふ官を宣へるなり。其よしは日本大國魂神。又は大地主神などある御名の意を以て。此神は御稜威のまさるき由緣を曉るべし。大倭神社註進狀に。傳聞倭大國魂神者。大己貴神之荒魂。與和魂戮力一心經營天下之地。建得大造之績。在大倭豐秋津國。守國家。因以號曰倭大國魂神。亦曰大地主神。以八尺瓊爲神躰奉齋焉。とはる大地主神是なり。（廿二社本緣にも。大國魂神を大地主神と申事は見えたり。）さて和魂と力を合せて心を睦ぶとは。彼和魂大物主神と御力を合せて。彼大己貴命の天下を經營給へる時は勞を助守

給へる趣なるべし。此荒魂大國魂神も。最早く別まして幽世にあるべしとハ知られたり。但し大己貴命の亦名を顯國玉神と申せとハ。もとより別なり。思ひ惑ふらと勿れ。抑亦名をハ。御身一ホして御名の又あるを云ひ。荒魂とハ既ホ別まして。別神の如くホを給ふを云ふなり。其を神代卷に。大國主神云々。亦曰顯國玉神古事記ホも宇都志國玉神。とある顯國玉ハ。顯世の國玉と云ふ義にて。此ハ幽世ひの國玉神の。最も大なる御所爲ホ准へて。稱へたる御名なるべし。幽世ホ坐を國魂神の御所爲ハ本ホして。顯世ホ坐を顯國玉神の御所爲ハ末なるべしと思ふべし。古語拾遺ホ。昔在神代。大地主神營田之日。以牛宍食田人。于時御歲神之子。至於其田。唾饗而還。以狀告父御歲神。發怒。以蝗放其田。苗葉忽枯損。似篠原。於是大地主神令片巫志止止肱巫今俗寵輪及米占也。占求其田。御歲神爲祟。宜以獻白猪。白馬。白鷄。以解其怒。依教奉謝。御歲神答曰。實吾意也。宜以麻柄作挂挂之。乃以其葉掃之。以天押草押之。以烏扇扇之。若如此不出去者。宜以牛宍置溝口。作男莖形以加之。是所以厭其怒也。薏苡子。蜀椒。吳桃葉。及鹽班置其畔。古語薏苡。上曰都須。仍從其教。苗葉復茂。年穀豐稔。とひの。大地主神ハ。

但し此神の御田營の故事ハ。顯世の御所爲ホハあらず。幽世ホてけことホるを。顯世ホ洩出て傳ハるしホハ何ぞ。ざるか。猶よく考ふべし。ハて右ホ出ある禁厭の狀ハ。長胤委く考へ得て。度々蝗の災を防ぎたれことも何ぞ。事ホがけぞバ。又序あらむ時ホ云ともむど。をれやゆぞバ。此處ホハ云ハざるホを。

ハて此大地主

神所謂大國魂神の御治ふ從ひ給ふ地主神則國魂神等ハ。古事記伊邪那岐伊邪那美命の國生坐る條に。此二柱神の國生坐る時よりて以前ふ。國土の形在ーー徵ハ。記紀ふ國之常立神とある御名の國是ふて。又此神より阿夜訶志古泥神迄十柱神等ハ。始よりて此國土とふるべき物の靈魂とふりて。御靈幸ひ給へバ。國土の大御祖ふーーて。所謂全地球の國魂神なりバ。其御稜威も遙ふ高く尊くはーまれ謂ありて。彼の倭大國魂神の御治ふ從ひ坐る。大八嶋ハ國々嶋々にふりとある國魂神とハ。太く異ふる謂あらむと思ふよりハ。大道本論ふも少くいへりとど。別ふ委ーく考ふるを書あり。古事記ふ。於是天神諸命以詔伊邪那岐命。伊邪那美命二柱神。修理固成是多陀用幣流之國。賜天沼矛而。言依賜也。とある。天神の是多陀用幣流之國と指ーー給へる國ハ。則國土なるを思ふべ。如此言竟而。御合生子淡道之穂之狹別嶋。長胤云ふ。此ハ應神天皇紀の大御歌ふ。阿波旎辭摩。とあり。又和名抄ふ。淡路國やふる是ふか。次生伊豫之二名嶋。此嶋者身一而有面四。每面有名。故伊豫國謂愛比賣。此三字以音。下效此也。讃岐國謂飯依比古。粟國謂大宜都比賣。此四字以音。土佐國謂建依別。長胤云ふ。伊豫國と。讃岐國ハ。和名抄ふもふて。聞えたるの如ー。萬葉二。玉藻吉。讃岐國者。國柄加。雖見不飽。神柄加。幾許貴寸。天地。日月與共滿將行。神乃御面跡次來。とある神乃御面ハ。則國魂神の御面をいへるふて。さて粟國ハ。古語拾遺ふ。阿波國とある是ふて。土左國ハ。和名抄ふ。土佐郡土佐鄉なるふて。土佐國とある是ふて。土佐郡土佐鄉なるを思ふべ。次生隱伎之三子嶋。亦名天之忍許呂別。二字以音。長胤云ふ。和名抄ふ。隱岐國とある是ふて。次生筑紫嶋。此嶋亦身一而有面四。每面有名。故筑紫國謂白日別。豐國謂豐日別。肥國謂速日別。日向國謂豐久士比泥別。自久至泥以音。長胤云ふ。筑紫嶋ハ。次々ふ別て。和名抄ふ。筑前國。筑後國。肥前國。肥後國。豐前國。豐後國。日向國。大隅國。薩摩國。とある是ふて。次生伊伎嶋。

亦名謂天比登都柱。自比至都以音。訓天如天。長胤云ふ。次生津嶋。亦名謂天之狹手依比賣。長胤云ふ。和名抄ふ。豐岐國とある是なり。次生佐渡嶋。長胤云ふ。和名抄ふ。佐渡國とある是也。次生大倭豐秋津嶋。亦名謂天御虛豐秋津根別。長胤云ふ。此ハ長門の岬より。奥羽の末の國々迄係て。海を隔て皆一續ふ連ぜる。大地ふて。今ハ數多の國々と別ぜあるおかり。故因此八嶋先所生謂大八嶋國。然後還坐之時生吉備兒嶋。亦名謂建日方別。長胤云。吉備ハ後ふ別ぜて。和名抄ふ。備前國。備中國。備後國。とある是ふて。ふ〳〵備前國ふ。兒嶋郡と云ふも違て。次生小豆嶋。亦名謂大野手比賣。長胤云ふ。此ハ桓武天皇紀ふ。備前國兒嶋郡小豆嶋。と違る是ふて。次生大嶋。亦名謂大多麻流別。自多至流以音。長胤云ふ。周防國ふ。大嶋郡あるふ。是ふて。次生女嶋。亦名謂天一根。訓天如天。長胤云ふ。此ハ豐後國人。小串重成の日女嶋考ふ。豐後國國東郡ふ|て伊波比洋の西南ふ沿て とふへり。次生知訶嶋。亦名謂天之忍男。長胤云ふ。此ハ肥前風土記ふ。松浦郡値嘉嶋。とある是ふて。次生兩兒嶋。亦名謂天兩屋。自吉備兒嶋至天兩屋嶋六嶋。長胤云ふ。兩兒嶋ハ。所在詳なら爻。但|神代卷ふも此事ハ。且々見えあせど古事記ハ。亦名迄あて。委きふよりて。此記を引出たるれて。此ハ何かる故ふや。神とも命やめなけぜど〳〵も。正|〳〵ハ其嶋々なきはを國魂神所謂國土の靈魂を生給へるにて。其亦名ふ某比古。某根。某別とあるを。決〳〵男神と聞え。又某比賣などいるをみれ女神と聞ぜたて。神代口訣ふ。八洲各有國魂。卽洲成之精神也。又松下見林ぞ神代巻校正評閲ふ。生大八洲者生其神ともあるが如し|。此國魂神等を二柱了合きて。其を生嶋神。足嶋神やめ。生國。足國とも稱せて。但|魂神ハ肉體の

神よりも。遥かに奇く妙なる謂ありて。數多ある御魂の一柱かなりて給ふことも有りて。又と一柱なるが數多かに別き給ふこともあるれて。其を古語拾遺神武天皇の御代に。都を橿原に遷し給へる條に。爰仰從皇天二祖之詔建樹神籬とある處に。此神籬は皇御孫命の天降坐る時に。高皇産靈神の授給へる天津神籬なり。生嶋之靈。今生嶋巫所奉齋也。とある大八洲之靈これなり。神名式に。生嶋巫祭神二座。並大月次新嘗。生嶋神。足嶋神とありて。祝詞式に。生嶋能御巫能稱辭竟奉。皇神等能前爾白久。生國足國登御名者白氏辭竟奉者。一神の御靈に二名を負きて。二座の祭坐る例は。豐磐閉門神。櫛磐閉門神などかやうに例あれど。こは數多の神を合きて。二名を負せたるれて。さて生と足とを對へて云ふ例は。生玉足玉。生産靈。足産靈。生日の足日なども猶あて。皇神能敷坐嶋能八十嶋者。嶋とは卽國を

いふ。次文に。狹國は廣く云々と云るを思ふ。谷蟆能狹度べし。ゐゞ語を互にしたるのみにことなり。極先師云ふ。狹は借字にて。眞渡るなり。此者は巫づく迄も靈く行通る物なれ故ふふ。鹽沫能留限縣居大人云ふ。此は海潮の滿ゆく時。流る沫の狹國者廣至て留る果といふて。天下の遠き限を譬ふ。峻國者平嶋能八十嶋墜事無。れたる事なくとは。漏る事なしと云ふ同じ。是國魂神ふるの故ふかくは祈申せるなり。皇神等能依左志奉故。皇神は御體としてある御魂なるの大土を。のある限なり。皇御孫命能宇豆乃幣帛稱辭竟奉登宣。とあるを思ふべし。又臨時祭式に。八十嶋祭中宮准此。とあるて。次に其祭料物を載せたて。又江次第に。八十嶋祭大嘗會次年行之。とありて。其祭式を委く載せるも。皆右の大八嶋の國魂神を祭

れるゐて。山槐記永暦元年十二月十五日の處に。今日八十嶋使。典侍右衛門督清盛卿女子かどもあて。其次第をも委く載たて。其ゝ此頃迄も嚴重ゝ祭ゝとのと見ゆ。なほ神名式に。攝津國東生郡。難波坐生國魂神社二座。坐名神大月次相嘗新嘗。と見え。和泉國大鳥郡生國神社鍬靫とある同神ゝるゝ也。信濃國小縣郡に。生嶋足嶋神社二座名神大。とあるも同神ゝて。以上ハみな。大八嶋の國魂神ゝるゝ。なほ此外ゝも古より。海川山澤を堺ひて。大くも小くあ。一國一嶋一縣一區ゝなゝたる地ゝハ。各國魂神則地主神あて。其地を主宰し給ふゐて。其例ハ神名式ゝ。攝津國菟原郡河内國魂神社。伊勢國度會郡度會乃大國玉比賣神社。此ゝ止由氣宮儀式帳ゝも見えたて。但ゝ神名秘書倭姫命世記ゝハ。祭神を大己貴命佐々良比賣命とあ。ゝど例の信ゝたゝ。又大國玉比賣神社。尾張國中嶋郡尾張大國靈神社。海部郡ゝも國玉神社あて。此ハ何ゝれらむ。遠江國磐田郡淡海國玉神社。又伊豆國那賀郡に。國玉命神社。又國玉命神社あて。此ハ何ゝの國魂の神ゝるゝ也。對馬國上縣郡嶋大國魂神社。又嶋大國魂神御子神社。とゝる某國魂ハ。必ゝ其國其嶋限の國魂神と聞えたて。此ハ古ゝて諸國ゝ數多ある中ゝ。うけゝて。祭來ゝ。ゝ偶ゝ式ゝ載せらゝたるゝるべゝ。又其一區堺なゝたる處處ゝも。各國魂神則地主神の坐ゝ例ハ。儀式踐祚大嘗祭條に。先祭七日鎮大嘗宮齋殿地其儀也。とゝる。其料庸布四段。安藝木綿一斤。凡木綿二斤。堅魚海藻各十斤。腊一斗六升。鹽四升。瓶十口。食薦十枚。雜菜子五升。柏五把。宮主執祭文入南

月月幷斜兩段訛讀祝詞鎮畢ぬと見ゆ。又臨時祭式小鎮新宮地祭。金銀各五兩。銅鐵各五十斤。水玉五十枚。絹五匹五色帛各五匹。倭文五尺。常布五端。庸布廿五段。木綿麻各五十斤。太刀五口。弓五張。矢五隻。鍬六口。鎌一口。鍬二丁。鹿皮五張。黃蘗五十斤。米五石。清酒五缶。各受三斗。稻二百五十束。鰒五斤。堅魚五籠。別受十一斤十兩。腊五籠。別受四斤六兩。海藻五籠。別受六斤。雜海菜五籠。別受六斤。鹽五籠。別受三斗。缶横瓮各五口。坏廿五口。匏五柄。槲五十把。薦十枚。絹衣二領。布衣一領。皂羅頭巾二枚。馬五匹。ゆど見えあり。又大神宮式小鎮祭宮地。後鎮准此。上同。心柱祭。鍬二口。五色薄絶各一丈。木綿麻各二斤。酒二外。米二斗五外。雜腊二斗五外。堅魚鰒各三斤。雜海菜二斗五外。鹽二外。鶏二翼。鶏卵廿枚。陶器土器各廿口。禰宜内人物忌等五人。明衣料絹二匹。度會宮減一匹。祭平正殿地。禰宜内人等八十人。明衣料麻布八十段。度會宮減半ゆど見え。猶所攝宮地鎮祭料迄を委〻載せらるゝあり。又齋宮式小鎮野宮地祭。後鎮准此。五色薄絶各五尺。倭文五尺。調布一段。庸布五段。木綿大一斤。麻二斤。鍬五口。米酒各五外。鰒堅魚海藻各五斤。腊鹽各五外。甘坏各五口。匏二柄。柏廿把。食薦五枚。席一枚ゆどあり。此ハみな。其區其地限の地主神を祭鎮る式なりバ。各一區堺をゆしたる地ゆそ。其分々小國魂神ハ坐せよ〻殘辨へ。ゆゑ大國魂神。亦名大地主神の大國大地ハ普通の稱名ゆもあらず。事實に渉りて。其地主神等ゆ皆悉く主宰〻給ふ大神ゆる故ゆ。御親ら大地官ゆ治むと宣へる由緣を能々思ひ曉る淡〻。神祇令義解ゆ。地祇者。大倭云々等類是也とゆるハ。此國土ゆ常の御在所をし給ふ故ゆ地祇とハ申を爲ゆて。其ハ此國土ゆおきて御所爲ゆゆふ故ゆて。萬葉五に。多治比眞人廣成ゆ遣唐使に發る〻時ゆ。山上憶良の詠て

贈て〜長歌ふ。宇奈原能。邊爾母奥爾母神豆麻利。宇志播吉伊麻須。諸能。大御神等。船舳爾。道引麻遠志。天地能。大御神等。倭。大國靈。久堅能。阿麻能見虚喩。阿麻賀氣利。見渡多麻比。事了。還日者。又叟。大御神等。船舳爾。御手打掛弖。墨繩遠。播倍多留期等久。云云とある。此宇奈原能。邊爾母奥爾母神豆麻利。宇志播吉伊麻須。諸。大御神等ハ。此大土の上に肉體を備へて鎮をはせ。尋常の神等を指して詠るにいあらず。主と青海原ふあるとゆらゆる魂神等を指したるふて。其海原ふ〜てハ。ゐるとへ爲。此陸地ふゆる。地主神を同じ心ぞへの神等を指〜てよゐるふて。其海原に多く魂神等の坐を例を以て云そ。ぱづ海底にハ。底津綿津見神。底筒之男神あて。中閉ゐを。中津綿津見神。中筒之男神ゆゆ。表ふハ表津綿津見神。表筒之男神あて。邊ふハ。邊津那藝佐毗古神。邊津甲斐辨羅神。邊疎神ゆゆ。又奥ふハ。奥津那藝佐毗古神。奥津甲斐辨羅神。奥疎神などは。ぞ〜。猶邊ふも奥にあ神等魂等の多く坐をことハ。數ぞへもゐくをべのちば。是等ハ神等ハみれ。右の國魂神ふ類ひ坐る神等なて。斯て天地能大御神等は。天神地祇を指〜ゐるふそゆをど。右の海原ハ神等に對へてゐぐ言の文なゐ〜たるみゐれバ。輕く見てあるぞ〜。また

倭大國靈久堅能阿麻能見虛喻阿麻賀氣利見渡多麻比云云ハ上ノ〻ふ大國魂神にて此神の天津御虛空天翔ケリ見渡し坐て守給ふをいふふかて其を此處ふ至りて此神の御名茂殊更に現して詠るもの右ふ出たる海原の八十魂神等に至る迄悉く主宰し給ふ大神ふるゑ故ふ特に重き意を現して詠る古人の意ふるを思ふべし世ふ萬葉集ふとてあそむて歌を作る人ハ多くにをとかうる深意ある事とすれふ見得ふるか見得ざるか其は知らぬ抑此神も其始ハ彼大已貴命よりて別を給へる荒魂神ふれども其御所爲に至りてハ却て全體のよりて遥ふ勝て已命より最既く生坐て特り御功績ある大八嶋の國魂神又海原の神等ふ至る迄を悉く主宰し給ふとハいふとも尊くいやかたく御稜威健き大神ふらぞやも○然先皇御閉城天皇雖祭祀神祇微細未探其源根以粗留於枝葉故其天皇短命也ハ崇神天皇を指し給へるふて其御壽命の短かりきと宣へる所由をかゝこみうしなふも窺ひ奉るに此天皇命の六年紀ふ先是天照大神日本大國魂二神炊祭天皇大殿之内然畏其神勢共住不安故以天照大神託豐鍬入姫命使祭於倭笠縫邑仍立磯堅城神籬古語拾遺ふ至磯城瑞垣朝漸畏神威同殿不安故更令齋部氏率

石凝姥神、裔。天目一箇神、裔二氏。更鑄レ鏡造レ劒。以為護身御璽。足今踐祚之日所レ獻神璽之鏡劒也。仍祧レ倭笠縫邑。殊立磯城神籬。奉レ遷天照大神及草薙劒。令豐鍬入姫命奉齋焉。とも見ゆ。

天照大御神を宮中を離ち奉りて。別地ふ坐せ奉り給へど。其地ハ大御神の大御心ふ叶ハを給そぬらゆ。次ふ引く文を以て明ふ知らさたり。其を垂仁天皇廿五年紀ふ。離天照大神於豐耜入姫命。託于倭姫命。爰倭姫命求鎮座大神之處而。詣菟田筱幡佐。此云夏還之入近江國東廻美濃到伊勢國時。天照大神誨倭姫命曰。是神風伊勢國則常世之浪。重浪歸國也。傍國可怜國也。欲居是國。故隨大神教立其祠於伊勢國。因興齋宮於五十鈴川上。是謂磯宮。乃天照大神始自天降之處也。とあるハ。此時にハよいを大御心を叶そせ給ふ處ふ鎮を坐る趣ふ。ケるハ止由氣宮儀式帳ふ。天照坐皇大神云云。爾時大長谷天皇御夢爾誨覺賜天吾高天原坐見志眞岐賜志處爾志都眞利坐奴。とあるる如く。彼五十鈴宮地ハ。既く高天原ふ坐して。御視を置給へる地ふ。其幽契ある地を探求給そ。徒を別地を坐を奉りて。伐指して宣へるならむ。其を御天降ル時ふ。此大御神の御靈實を捧持給へる。皇御孫命を出迎へ給ひ。猿田彦大神の。直に此五十鈴川上を到給へるも。終ふハ天照大御神ハ鎮を坐をべ地ふるの

故ふ。既く彼地ゑ到てゑ。其時ゑ待給へるなるべ〜。其そ大神宮儀式帳。大御神ハ鎮座の故事ゑ誌せる處ふ。爾時宇治大内人仕奉。宇治土公等遠祖。太田命乎。汝國名何問賜支。是川名佐古久志留伊須々乃川止申。是川上好大宮地。在申。即所見好大宮地定賜比豆。とある太田命ハ。則猿田彦大神の御裔ゑて。又此時も大御神ゑ出迎へ給ゑるこゑをも思ゑ合せべ〜。さて其天皇短命也ハ。崇神天皇六十八年。紀ふ。冬十二月戊申朔壬子。天皇崩。時年百二十歳。明年秋八月甲辰朔甲寅。葬于山邊道上陵。とあゑて。古事記崇神天皇條に。天皇御歳壹佰陸拾捌歳。御陵、在山邊道勾之岡上也。とあるそ。何のふるゆゑゑや。四十八歳の遊むあゑて。

抑此天皇命の大御代ハ。天社國社の神事ゑ始て。天下ゑ蒼生ゑ至るまで。能く治ゑ給むて。其御功績の高きことそ。神武天皇の大御代ふも。然び立給ふぞのゑなきバ。御肇國天皇とも稱奉ゑ。あゞ一ゑ闕けるる事あゑて。御壽命の短こゆ〜ふ。最もゑとも。かゝれことの限ふゑ。此一事殘以ても粗略ふなゝ〜ごゑきハ。幽世の神ゑ御上ゑ。ゑとを能々思ひ辨へて慎むべ〜。其そ今世の人の壽命に比較奉てハ。百二十歳の御壽命ハ遥に長く思ふもゆるべなれど。垂仁天皇の百四十歳の。御壽命ゑ保ち給ひ〜ふ對へ奉ゑてハ。こよれ〜短く坐ま〜ゑ

思ひ奉て。又大國魂神のこゝは由縁までを知看給ふ
べき。高く尊くゝゝて。ひゝぐの故あるこゝをも。能々思ひ奉る
ぱし。○是以今汝御孫尊悔先皇之不及而。慎祭則汝尊壽
命延長。復天下太平矣。こゝは垂仁天皇の御代ゝ天照大御
神を。伊勢國に坐き奉てゝを指ゝて宣へるかゝ。其を此
御代の九十九年、紀ゝ。秋七月乙巳朔戊午。天皇崩於纏向
宮。時年百四十歳。冬十二月癸卯朔壬子。葬於菅原伏見陵
とあて。古事記垂仁天皇、條ゝ。此天皇御年壹佰伍拾參歳。御陵、在菅原之御立野中也。と見ゑて。甚く違へる
ハ何ゝあるよゝあてゝゝ。時ハ。書紀の年季ハよく叶へども。古事記のかゝハ。却て
垂仁天皇ゝ御壽命をて。崇神天皇の御壽命の長く坐て。御壽ゝハ合ハざるねて。○時天皇聞是
言。則俾中臣連祖探湯主而卜之。誰人以令祭大倭大神。卽
渟名城稚姫命食卜焉。とゝある中臣連祖ハ。神代卷に。中臣
遠祖天兒屋命とある。此神の御裔ゝる事云ゝも更ゝて
同卷に。又天兒屋命。主神事之宗源者也。故俾以太占之卜
事而奉仕焉とある如く。此探湯主とゝゝ人も。御祖神ゝ
御職を受繼ぎて。神事之宗源を司る家ゝる故に。此時も
太占之卜事ゝ以て仕奉てゝなるぱし。殊ゝ探湯主を云
ふ名を探湯ゝよゝて聞ゆ。其を應神天皇紀ゝ。是以
武内宿禰與甘美内宿禰共出磯城川濵爲探湯武内宿禰
勝之と云ひ。又允恭天皇紀ゝ。上下相爭百姓不安。或誤失

已姓或故認高氏其不至於治者蓋由是也云云詔曰群卿百寮及諸國造等皆各言或帝皇之裔或異之天降云云故諸氏姓人等沐浴齋戒各爲盟神探湯則於味橿丘之辭禍戸岬坐探湯瓮而引諸人令赴曰得實則全偽者必害於是諸人各著木綿手繦而赴釜探湯則得實者自全不得實者皆傷是以故詐者愕然之豫退無進自是後氏姓自定更無詐人なぶひる探湯ハ。專ら神等ハ誓ひて。眞偽を定むる術かれど。とーくいかゝる神事殘司をーー人なる故ゴ。探湯主といふ名を負たるふハあらざるこの。古ハ何事ゐ神の御心を本をーー。もはもる大御手風なるからに。今此

倭大神の御杖代を定め給ふゴも。御占を以て其よーーこのーを伺ひ給へるなり。○因以命渟名城稚姫命定神地於穴磯邑祠於大市長岡岬とある穴磯邑ハ。神名式に。大和國城上郡穴師坐兵主神社名神大月次相嘗新嘗。をあをて。此穴師を地名ゐて。今ゐ穴師村ゐ立を給ふよーーゐをど。大抵此ひゐふを地なるべーー。又大市ハ。崇神天皇九年紀ゴ。倭迹迹日百襲姫命の薨坐る處に。葬於大市。故時人號其墓謂箸墓也とひる大市と同處と聞えて。和名抄城上郡ゴ。大市於保以智とあれ是ゐを。又城下郡ゐ。大和於保夜末止。などもあを。但ーー城上下郡ハ。古ハ一郡なをバ。此大和郷ハ。とーーくハ大倭大神のまーーはしゝ地ゐる故ゐ。其稱の殘をる

ふハあらどゝ。故是らを以て按ふに。此時ふ神地を定め給へる處ハ。今ハ山邊郡新泉村のあたりにハひらばきバ。又其後ふ社地を換へ給ふるなるべし。○然是渟名城稚姫命。既身體悉瘦弱以不能祭ハ。崇神天皇六年紀ふ。亦以日本大國魂神託渟名城入姫命令祭。然渟名城入姫髮落體瘦而不能祭とあると。專ら同じ傳と聞ゆるに。崇神天皇の六年より。今此垂仁天皇ハ廿五年迄ハ。其間八十六年ばかりハ違ひなれど。疑そしれふ似るハども。崇神天皇六年紀ふ出たる故事ハ。其天皇命の皇女ハ御上りあるし事ふる故に。大御父の御代ふ序でたるうて。實ハ垂仁天皇の廿五年ふひなるし事れるふや。又ハ崇神天皇ハ六年にあるし事の紛れて。垂仁天皇の廿五年紀ふ入れるるふや。左ふも右ふと障あるて。祭るうとハ能ハばるし。一度ふるべし。さて此渟名城稚姫命ハ。崇神天皇の皇女に坐して。既ふ御占ふも出たる趣ふるふ。ふのれふ所由ありて。齋き祭る事の能ハばるふや最もかしこ事れるか。○是以命大倭直祖長尾市宿禰令祭矣とある。大倭直の本ハ。神武天皇紀ふ。天皇親帥諸皇子舟師東征。至速吸之門。時有一漁人乘艇而至。天皇招之因問曰。汝誰也。對曰。臣是國神名曰珍彦。釣魚於曲浦聞天神子來。故即奉迎。

又問之曰。汝能爲我導耶。對曰。導之矣。天皇勅授漁人椎檝末令執而牽納於皇舟以爲海導者。乃特賜名爲椎根津彦。（椎此云辭毗）此卽倭直部始祖也。

聞えたて。（古事記神武天皇條に。椎根津日子。此者倭國造等之祖と見え。國造本紀に。以椎根津彦命初爲大倭國造ともあり。）姓氏錄（大和國神別）に。大和宿禰出自神知津彦命也。

神日本磐余彦天皇。從日向國向大倭國到速吸門時有漁人乘艇而至。天皇問曰。汝誰也。對曰。臣是國神也。名宇豆彦。聞天神子來。故以奉迎。卽牽納皇船以爲海導。仍號神知津彦（一名椎根津彦）能宜軍機之策。天皇嘉之任大倭國造。是大倭宿禰之始祖也。（又攝津國神別に。大和連神知津彦十一世孫。御物足尼之後也ゆゑに見ゆ。）

て。此椎根津彦命の裔と聞えあり。仍て令祭矣ハ。倭大國魂神を齋き祭りて。（但し此時に。大倭直長尾市宿禰の倭大神を坐せ奉りしよりて。子孫其職を受繼て。彼仁安二年に。註進狀を誌して奉し。大倭直歳繁も其後なるべし。）其の神名式に。大和國山邊郡大和坐大國魂神社三座（並名神大月次相嘗新嘗。）をはるそ此大神なり。今新泉村に立せ給ふて。官幣大社に列て給へて。大倭神社註進狀に。謹考舊記曰。大倭神社在大和國、山邊郡大倭邑（長胤云ふ。今の新泉村ハ註進狀を誌きる仁安の頃ハ。大倭邑といひしに。）や。蓋聞出雲杵築大社之別宮也。（史傳に。大國魂神ハ。杵築大社に坐せ。大國主神の荒魂の御名なれバ。其宮を大社の別宮と云ふも實事ハ違ふべきとあるべし。）傳聞倭大國魂神者。大己貴神之荒魂。與和魂戮力一心。經營天下之地。建

得大造之績在大倭秋津國守國家因以號曰倭大國魂神亦曰大地主神以八尺瓊爲神躰奉齋焉。長胤云ふ。御靈實の八尺瓊ふ坐せこと。是ふて明ふ知らせたて。神代卷に。大己貴命の國避の處ふ。配將自此避去。卽披瑞之八坂瓊而長隱者矣とあるを以て。史傳ヲハ。此時の八坂瓊を以て神体として。祭せるふらむと。此時の八坂瓊ハ。出雲國ふ留めふらむと思ふよりあてて。既ふ上ふ云へるの如し。ほて此神を祭せるおらむと思ふ社ハ。神名式ふ。伊勢國多氣郡大國玉神社。常陸國眞壁郡大國玉神社。陸奥國磐城郡大國魂神社。淡路國三原郡大和大國魂神社名神大。阿波國美馬郡倭大國玉大國數神社、二座。壹岐國石田郡大國玉神社ふど見えたて。さて國玉神とれふに。三の差別あてと思ふよりあてて。其を大道本論ふ云ひ置ある を見よ。相殿神二座。八千矛神。御年神。傳聞八千矛神者。大己貴命以廣矛爲杖。令撥平豐葦原中國之邪鬼。是時大己貴命號曰八千矛神。神代卷曰。吾以此矛有治功。皇孫若用此矛治國者。必當平安。我當於百不足之八十隈將隱去矣。言訖。卽躬披瑞之八坂瓊而長隱常世鄉者矣。長胤云ふ。こゝふ引る神代卷ハ。今の版本とハ異也。心得置べし。此矛亦上古在天皇大殿之內。其藏齋爲八千矛神之神体。今云ふ。此廣矛の上古ハ。天皇命の大殿の內にあてとハ。神代より。彼崇神天皇の大御代迄。大殿の內ふ祭置給へるを いふ。ふて但し大和神社ふ。此八千矛神もほけれといへとも。此ハ相殿神ふて。主とハ大國魂神を以て祭せる社ふ。ふきバ。思ひ惑ふらとなるを。御歲神守護禾穀也。是以八握嚴稻爲神躰。古語拾遺曰。大地主神營田之日。御年神獻白猪白馬白鷄。奉謝無蝗蟲之災。年穀豐稔。とあてて。御年神の御靈實に。八握嚴稻を以て坐せ奉る所由ハ詳ふ聞えたて。中右記永久六年六月の處ふ。軒廊御卜。

是大和國大和社去二月九日戌刻。俄有火實殿三宇炎御正躰燒亡也とあて古よて實殿を三宇炎べて坐を奉て來ぎるよしなり。此時ハ御靈實の燒亡給ふとハ。ハとも恐く。最も慨き事ふて。ふて此御年神を大國魂神亦名大地主神の相殿ハ坐せ奉て一所由そ。〻に引る古語拾遺の辨足らぎして。れ〻〻〻聞ゆぎども。元來稻ハ田ハ生立て。大土の力と和合して物ふれバ。深く緣あて。但一歲とハ主と稻を以て云ふ稱ふて。歲神ハ其年穀を守給ふ神ふて。殊て大地主神の御田を營給ひ一時に。牛宍を以て田人て食しめ給へるに。御歲神甚く怒て固して。其田ハ蝗を放ちて祟給むしを依て。白猪白馬白鷄を奉て。御年神の怒を宥て。其災を除き給へる由緣ハよて。相殿

ハ炎べて坐を奉て〻〻見えたて。神代卷皇孫命の照大御神の詔て。以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾兒とあるを以て。史傳に。御年神の相殿ハ坐ハ天降坐る條ハ。天所由詳ならぬハ就て。深く考ふるハ。此ハ入握嚴稻を以て神體と爲をと云へをバ。皇御孫命。御天降の時ハ。天照大御神の齋庭の穗を事依一給へるを天降坐て後ハ其稻穗をバ。種て殖給ひけむを。其ハ中ハ。入握嚴稻を撰びて。御歲神の神體と一て。共ハ大殿內て齋き祭て給へて一を。大國魂神を。御社ハ祝ひ給ふ時ハ。其因を以て相殿ハ祝ひ給へるハや。とあて。已ぬを。文德實錄に。嘉祥三年說とハ別ふて。人よたを採るべし。

冬十月乙巳朔辛亥。進大和國大和坐大國魂神階。授從二位。長胤云ふ。同日の處に。大神大物主神授正三位とあて。又同錄に。仁壽元年九月庚午朔乙酉。特擢出雲國熊野杵築兩大神炎加從三位とあて。何をも此時ハ御位を授給へる事の書ハ見えぬる始ふる。抑天上ハ日隅宮ハ坐を大己貴命の現御身と。杵築大社ハ坐に大

已貴命をべくの御魂と。大三輪ゝ坐せ和魂大物主神と。大和ゝ坐ゝ荒魂大國魂神とハ。御所爲も御社も別ゝて混ゞがゝたよゝハ。上ゝ出をる神祇令義解ゝ天神者云云出雲國造齋神等類是也。地祇者。大神大倭葛木鴨。出雲大汝神等類是也とある如く。天神ゞ地祇との違ひいるを始め。但ゝ出雲國造齋神ハ。杵築大社ゝよゝ。大己貴命全體の御靈を指ゝたるハ論なし。此を天神の部ゝ收たるハ。既ゝ上ゝ云ふ如く。天上の日隅宮ゝ到坐るゝの御靈を齋き祀るゞ故ゝて。又大汝神を重て地祇の部ゝ收るを誰も重復をる如く思ふべけれど然らば。此ハ神名式に。出雲國出雲郡大穴持神社。意宇郡布自奈大穴持神社。同社坐大穴持神社。神門郡同社大穴持神社。など數多ゝある中ゝハ。必ゞ此國土をうゝはきまゝて。所謂國神とまゝ時の御靈を招き祀ゝものゝかるべけきバ。其を指ゝて地祇とハ云ふなり。はゞ天神部ゝ。出雲國造齋神と出たる。杵築大社とハ同ゞ大己貴命といへども。招き奉ゝ本つ神ゝ天地の違ひあるゞ故ゝて。此ハ誰ゝの人も思ひ惑ふ處なきバ。殊更ゝ斷ゝて置くとけぞかゝ。

三代實錄貞觀元年正月廿七日處ゝ。奉授大和國從二位勳二等大神大物主神從二位勳三等大和大國魂神ゝ從一位。出雲國從三位熊野神勳八等杵築神ゝ正三位ゝとゝて。同日ゝ奉ゝ御位なるに其階級の等ゝこのゝばるを別神別社の御饗應(ミアヘ)をるゞ故ゝて。なほ神名式ゝ。大神大物主神社(名神大月次相嘗新嘗)大和坐ゝ大國魂神社三座(名神大月次相嘗新嘗)杵築大社(名神大)ゞのゝて。和魂と荒魂ハ名神大月次相嘗新嘗の祭ゝも預ゝて給へども。杵築大社ハゝゞ名神祭式ゝ預るゝゝゝる

を以ても別神なる徴と云ふべし。其は既ふ別さて別神の如くになる給ふ上も。御所為も等からざる事ハ上ゐ云ふ如し。譬へバ別魂の御稜威優さて。現御身の御稜威比劣さるごゐて。神功皇后紀ふ。於是從軍神。表筒男。中筒男。底筒男。三神誨皇后曰。我荒魂令祭於穴門山田邑也。時穴門直之祖踐立津守連之祖田裳見宿禰啓皇后曰。神欲居之地必宜定。則以踐立爲祭荒魂之神主仍祠立於穴門山田邑とゐるハ。同紀の始ふ。荒魂爲先鋒而導師船と詔へる荒魂神ふて。此時に祭給へるゐ。神名式ふ。長門國豐浦郡住吉坐荒魂神社三座太名神大とあるこれふハ。又右ふ引る同紀の伝ハ續に。亦表筒男。中筒男。底筒男三神誨之曰。吾和魂宜居大津渟中倉之長峽に。因看往來船。於是隨神教以鎮坐焉とゐるも。同紀の始に。既而神有誨曰。和魂服玉身而守尊命と詔へる和魂神ゐて。此時に祭給ふゐ。神名式ふ。攝津國住吉郡住吉坐神社四座太名神大月次相嘗新嘗とゐるさ也ゐて。さて此荒魂和魂ハ。神功皇后の三韓征伐を守助け坐て。嚴き御稜威を顯ハ給ふ御功績を推察奉るに。現御身及びをべての御魂ハ。何ゐの社ふ坐て。何ふる御所爲のゐるゐ。今知るべきよしなしとハへども。此荒魂和魂ふどに至てハ。其御稜威ゐもたさおは劣て給ふべくもゐらざるをや穴かしこ。況た現御身と全體の御魂比御稜威優さて。別魂ゐまハ荒魂和魂比御稜威比劣さるもゐ比ぞ。其神其事實の傳ふ依て辨へ曉る爲き態ふさバ一向ゐハ定ゐかゐ知ものふて。神宮雜事記長元四年六月條に。齋王御託宣云。我皇大神宮之第一別宮荒祭宮也。而依大神宮勅宣天。此齋内親王に所託宣也。云云。皇大神宮ハ高天原與利天降御之後。人閑に未寄翔御須。とゐる大神宮ハ則神名式に。伊勢國度會郡大神宮三座相殿坐神二座太大預月次新嘗等祭とゐるこれふて。又荒祭宮ハ。同式ふ。荒祭宮大月次新嘗ゐあゐて。則神功皇后紀ふ。御親ら撞賢木嚴御魂天疎向津媛命と誨給へる荒魂神なるゐ。依大神宮勅宣天。此齋王に所託宣也。云云。皇大神宮。高天原與利天降御之後。人閑に未寄翔御須。とゐ

る上も。何時の御誨も。みな此荒魂神なりて。此ハ本ゐ御魂とまゐ。本宮天照大御神の詔命を奉て。物〳〵給ふこゝ聞えたれバ。御所爲ふ優劣ゐるなも推て知られるを。其は皇御孫命の天降坐る時ふ。天照大御神の詔命ふ。吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡と詔ひて。特更に大御心をこゝそて。其御靈を取託給へる御靈實ゐ鎮ゐはも大宮ふ〳〵ひられバ。其御幾威ハ天宮に亞て佐もひるゐ佐ゐ謂ゐ。然らで幷築大社ゐ坐ゐ。大己貴命ゐもべての御魂ゐ御所爲ハ何ふと云ふふ。正史實錄ふ見えたるもなく。又彼國の故事を主ゐ誌きる出雲風土記ゐ。所造天下大神とハ多くあゐど。其餘の事ハ露ほども見えざれバ。何ふとゐ云ひ〳〵。只大社志とゐふ書ゐ少かハ見正ゐることもひゐど。此ハ普通の縁起ふ似たる後世の書なれど左ふ右に論ふ迄もひらぐ。今そゐで正史實錄ゐ始め。彼國ゐ風土記ゐど古ゐ書ふ見えたる限を以て論ふみふ。かく論ふ時は。明治十三年の春ゐて。

○追加

ひのそゐ吾ゐの神道事務局の神殿は。明治六年に。始めて東京芝ふ大教院を置ける時に。天御中主神。高皇產靈神。神皇產靈神。天照大御神を齋ゐ祀〳〵ゐ。同八年ふ今ゐ日比谷ふ遷〳〵奉て。其後新に神殿を營建て。同十三年四月遷宮式を執行ゐし時ゐ當りて。大國主神ゐ地球幽政の大

主宰まして。天下に諸神祇統御を給ふ。又人民死後は靈魂なも審判し給ふ神なりとせり。此神は御名を舉て。彼四柱大神等を始め齋ひ祀らむと申出る教導職のあるて。終に其說を廣く天下に告げ知らしめ。同じ志ある人々を次々に誘ひ集へて。專ら其典祇行を事を議たりき。然るに彼神まして御所爲にある事正史の徵もなき僻言を設けて。世を誣ひ大道の穢をならむ事を慨み憤る人人も多くして。天下教導職は議論二に別れて。互に教義を同くせれば能はず。斯て十四年一月の末に至りて。互に云出きしも。此祭神祇定むるたまへ。恐くは　天皇の朝廷の大御定を乞祈て。其詔命は隨に仕奉はるべき議定を。直に其由を奏し奉りまかり。其二月廿三日は詔命に。改めて宮中に。被齋祭處の神靈を遙拜奉仕可致事とのり。又別紙に中央に賢所。左に天神地祇。右に歷代皇靈を認めて下し賜へり。實に尊れ大詔命かしこし。抑賢所と申奉るは。誰も知れ如く。中古内侍所と稱奉りて。太古より天照大御神を坐奉る所なりと論むなく。又天神地祇は。歷代皇靈は。明治三年の春。神祇官八神殿は左右に。坐を奉りし祇。當官を廢止給へる明治五年に。右は賢所の相殿に。遷し奉し神等に

おゝけもまだ此天神地祇は中みなを。大國主神も坐せと雖め。殊更に御名を表して。祀らしめ給そざる限を。彼地球幽政の大主宰。又人民死後は靈魂を。審判し給ふ神など云ふ說は。全く近頃の學者等は考ふ出たる誣說なるまつゝ明らけし。其は此書を板み彫出す時ふ臨みて。かゝる尊記大御定を蒙るゝ。再む吾ゞ道の大本は。明ふ知りゆくさとふ。嬉しみ歡しみゝ。又まつゝに追ひだて。たゝる置くものぞかし。

明治十四年三月廿八日出版届濟同四月廿日刻成
東京麹町保町四番地住
府下平民
著述兼出版人　常世長胤
定價七拾五錢
木邨嘉平刻

常世長胤著述書目　　榮木廼舍藏版

○每朝神拜祝詞 小折本 一帖 刻成
○木匠祝詞 小折本 一帖 刻成
○臨時祝詞 小折本 一之卷 刻成
○祝詞譜考定 一卷
○上等葬祭圖式 一卷 刻成
○葬祭祝詞集 小折本 一卷 刻成
○葬祭祝詞集之解 三卷
○學神考 一卷
○神事宗源傳 五卷
○每朝神拜祝詞講義 一卷
○木匠祝詞講義 二卷
○臨時祝詞 小折本 二之卷 刻成
○玉之緒結 一卷
○大道本論 一卷 刻成
○小汀之論 一卷 刻成
○榮木廼舍祝詞集 二卷
○宣教使詔書註解 一卷
○神祇官沿革物語 一卷